
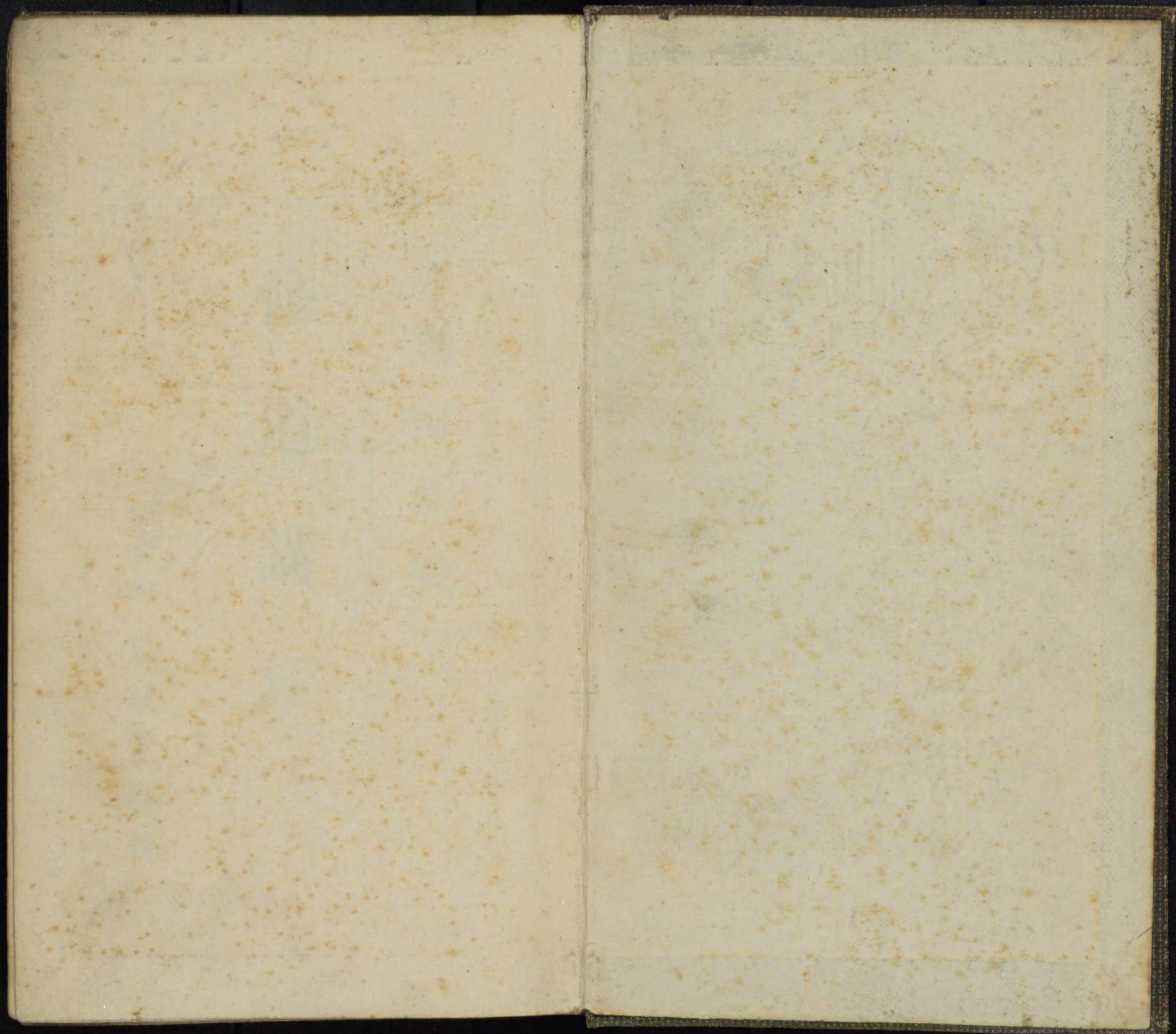


569  
21



569-21  
  
1200501516979







加藤

修

咄堂著

道

講

話

東京 忠誠堂發行



## 靈覺と人生(自序)

靈覺高遠の義にあらず。人生豈に卑近の事ならむや。流れに浮ぶ水沫の且つ消え且つ結ぶが如き五十年の生活も仔細に其始終する所を究めむか。久遠の大初に萌して永劫の末に流るる無限の時間に繋がり、天は之れを育み、地は之れを養ひ、人と人と相結びて、一波動て千波萬波六合に普遍し、乾坤に瀾淪す。么微なりと雖も、宇宙の一部分、靈覺の氣相通ず、これ小か、小にあらず、之れ微か、微にあらず。天地といひ、宇宙といひ、六合といひ、乾坤といふ。高くして高く遠くして遠きが如きも、我を棄て、天地も其の一部を損じ、宇宙も其の無限を誇る能はず。一葉頭上の露にも乾坤の靈覺は宿り、道の邊に咲く艸花にも六合の妙機は伏す、況んや人生の驢事馬事、其處に靈覺の存せざらむや。唯だ人、日常の驢事馬事に没頭して靈覺の伏するを知らず、獨り自ら卑んで茶飯の中に妙機を逸す。若し自ら自己の無限に亘るを反省して、浮動常なき心裏の奥底に大靈の影宿るを洞見せば、身は刹那の生滅に捕はれたる俗境を躡跳して直に靈覺の妙地に入らむ。求めよ、さらば與へられん。門を敲かば必ず人の應ふるあらむ。されど此の境亦他の風光なし。到得還來無別事、其の認得する所

序

文

一

のものは依然たる眼横鼻直、花は春雨に開て葉は秋風に落つ。一たび靈覺の境に遊んで、此の俗塵に處す。喫茶喫飯昔の如くにして又昔日の擾々たるなし。蓋し人生は靈覺を得て興趣あり。靈覺は人生を待つて發露せらる。

萬物悉く吾に備はる、天地の大靈は來つて我が方寸の中にあり、宇宙の妙用亦我が擧手投足の中に存す。若し此の理を徹見し、此の境地に悟入せば神人融合、何ぞ我を小とし宇宙を大とせむや。大小を絶し、高低を超え、窅然として天地の懷に入る。我が心、太虚に等しく我が身乾坤に遍在し、長風に駕して塵事を下瞰し得むも、これ靈覺の妙にあらず。奇なる哉六合。大處は大用、小處は小用、高處は高用、低處は低用、鶴の脛長しと雖も、之れを斷つべからず、鴨の脛短しと雖も、之れを繼ぐべからず、長短各々用あり、大小皆其の處を異にす。用ひて其の宜しきを失はざる所に自由の天地あり。大道を徹見して此の細徑に用ふ、道豈に遠きにあらむや。之れを求むるに精ならば大道は汝の脚痕にあり、靈覺豈に難からんや之れを誠にするの心あらば、日常行中、妙機存せむ。

# 修道講話目次

## 上 篇

### 一 求道の精神 ..... 一

汝自身を知れ——醉生夢死——無常觀——微小觀——哲學の見解——吾人  
と宇宙——萬物一體——萬物相關——智と情——宗教的情操——自ら味へ  
——至心誠實——求道の精神——慧可斷臂——求めよさらば與へられん——  
——信心——道は邈し

### 二 安心の關鍵 ..... 二四

心の妙——主人公——靜坐瞑想——罪惡の自覺——懺悔——自ら救ふの力  
——歸家穩坐——人類の權利——一念裏——自然の要求——大道現前——

罪性不可得——弱き力——強き信仰——那先比丘——懺悔と信仰

三 修養の道程……………四

誘惑——降魔——心内の紛亂——良心の閃光——罪惡の根本——人空法空  
——懺悔の方法——慕直進前——魔軍大敗——心内平穩——自ら克つ——  
習慣の力——轉心法——修養の三階級

四 宇宙と人生……………六六

宇宙の大道——唯物と唯心——王陽明——近世哲學の傾向——汎神觀——  
人格の感化——個人の本務——遁世脫俗主義——許由——動中の修養——  
現世輕賤主義——來世の要求——自殺論——武士道——平常心是道——實  
行を貴ぶ——我が宗教

五 生活の趣味……………九三

生活の苦痛——道義的生活と宗教的生活——趣味ある生活——壯美と優美

中 篇

一 道とは何ぞや……………二七

——宇宙活動の二面——奮闘的生活——人としての成功——自信——同情  
的生活——禽獸に對する同情——愛——慈悲——富樓那——拱辰——簡易  
なる生活——有用と無用

老子の道——基督教の道——至道無難——宇宙の意義——菩提——佛道——  
——聖人の道——教權主義を排す——自由討究——寛容の態度——天道、人  
道——至誠、博愛、正義——道は人に依らず——武士道——商業道——藝  
術道

二 人の心……………一三六

研究の困難——佛教は心を主とす——事心理心——意識——阿頼那——總

目次

四

該萬有心——眞善美を求む——悲哀の快感——誠心——空也上人——三遊亭圓朝——外界の影響——修道者の任務

三 煩悶と社會

一五二

煩悶者の年齢——時代——人生の危機——成功談の影響——戀愛——情死——生活の困難——家庭の不和——社會の壓迫——身體の不健——人生問題の解決——一種の利己主義——志士的精神

四 徒歩的人生觀

一六八

五十年の大旅行——獨立獨歩——共同一致——秩序的進歩

五 小なる道徳

一七三

細謹を顧みる大功——報徳會實踐事項——死者に對する禮義——釣錢——訪問の事——清規

六 修道漫録

一八八

奢侈を戒む——衣食住——行誡上人——仁王禪——鈴木正三の禪風——雲居禪師——乞食桃水——迷ひの本——敵と友——提婆の死——友道——財を惜む——金と人——己が影——狂歌問答——法衣——動中修養——無常迅速——和歌と俳句——一日暮し——時の區劃

下 篇

一 國家と人道

二二九

國運の發展——文明の發展——國王の十徳——地方自治——國家と地方——戊申詔書——自治の精神——自覺——自護、自制、自奮——共同の精神

二 實業と修養

二五三

精神の食物——働く本義——共同生活の美——報恩の觀念——現代の文明

目次

五

は富の文明——日本の産業——發達の餘地——公共の精神——宗教の安心

三 心の收獲

.....二六八

農業と修養——一茶の勸農詞——農業の樂——修養の樂——柳生十兵衛——

——正念坊の壁書——八福田——心の豐年——今日一日の事——心田の耕耘

四 修道訓話

.....二九三

迷の本——愛欲——悟の性——當成佛——改過——慚愧——反省——自心

を見よ——克己——宮樓那物語——怨——勉勵——不惜身命

佛教々理要論

第一章 序論

.....三二七

先天的宗教思想と顯示者——宗教とは何ぞや——平等と差別

第二章 佛教の目的

.....三三六

因縁生——眞如——唯心の所規——十界迷悟——轉迷開悟

第三章 佛教の理法(上)

.....三三五

遷流と常住——生死——輪廻

第四章 佛教の理法(下)

.....三四〇

進化と退化——苦樂——厭世教——四種の受業

第五章 佛教の極致

.....三四五

眞如と涅槃——涅槃の二義——佛陀の性相用——法應報の三身

第六章 佛教の修業

.....三五二

善惡の標準——六波羅密行——三學



第七章 佛教の信仰 ..... 三六〇

他力門——念佛の理——聖道と浄土との比較——浄土門梗概

第八章 佛教の歴史 ..... 三六五

釋尊以前の宗教——釋尊の傳——印度——支那——日本佛教史

目次終

修道講話

上篇

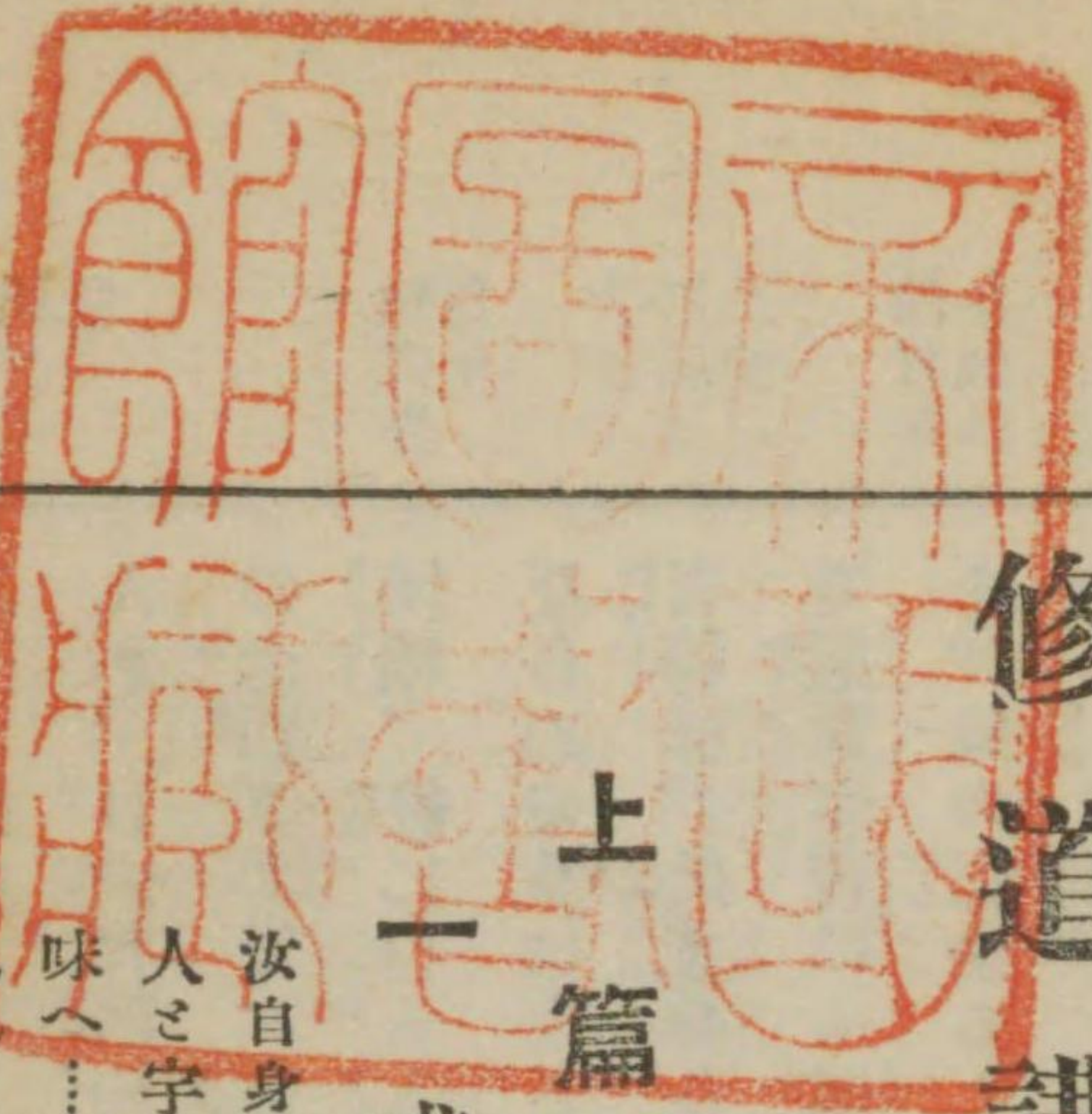
一 求道の精神

汝自身を知れ……醉生夢死……無常觀……微小觀……哲學の見解……吾  
人と宇宙……萬物一體……萬物相關……智と情……宗教的情操……自ら  
味へ……至心誠實……求道の精神……慧可斷臂……求めよさらば與へら  
れん……信心……道は邈し

行き暮らしたる旅の空。鐘の音さびしき孤村の夕。吾等の心には云ひ知れぬ

求道の精神

加藤 咄 堂 著



寂寥

疑ひの雲

知は光なり

汝自身を知れ

寂寥を感じつゝも尚ほ行くての道を知ることによつて幽かに希望の光を認め此寂寥を慰むることが出来るのである。若し一たび踏み迷うて心に疑ひの雲起らんか、日未だ西山に没せず、暮色未だ遠く來らずとも、我が心には早くも不安の念萌ざして、右せむか、左せむか、行かむか、止らむか、躊躇、逡巡、煩悶、懊惱、終に自ら人なき山路に踏み入りて、黑白もわかぬ暗夜を幽谷に送らねばならぬやうになるのである。蓋し知ることは光りにして信ずることには力である吾等は、此光りを辿り此力によりて千里萬里の道をも行くこゝが出来、如何なる艱難辛苦にも耐へることが出来るのである。此の知るこゝは何を知るのであらう。此の信ずるとは何を信ずるのであらう。古聖はいふ、須らく汝自身を知れと。然り自ら知るは明なり、光なり、吾等は果して能く自ら知つて居るであら

何の爲めに働

生命に限りあり

うか、日々營々として働き而して其何の爲めに働かねばならぬかを知らぬのが多くの人ではないか、唯だいふ生きんが爲めに働かざるべからずと、働くこゝが果して吾等の生命を永遠に持續するの術であらうか、如何に額に汗して働くこゝも吾等の生命は限りあるのである。

ながめこし花も空しく散りはてゝ

はかなく春の暮れにけるかな。

櫻花さくこ見しまに散りにけり

夢かうつゝか春のやま風。

さいうたのは花ばかりではない。咲く花の色は匂へど、やがてまた散りぬるものを、我が世のみ、誰ぞ常あるものならむ」で、人生も此花の如く散らざるを

時は我等を奪ひ去る

道を知り

得ないのである。ポーブはいふ「年々歳々時は日々何物かを吾等より奪ひ、而して終に全く吾等を奪ひ去る」云。働くも死し働かざるも死す、生きんが爲めに働くこいふは全く無意義の譚語で未だ自身を知らぬもの云はねばならぬ。

佛、諸の沙門に問ひたまはく、人命幾ばくぞ。一沙門對ふ、數日の間にあり。佛のたまはく、汝、未だ道を知らず。一沙門對ふ、飲食の間にあり。佛のたまはく、汝、未だ道を知らず。一沙門對ふ、呼吸の間にあり。佛のたまはく、善哉、汝、道を知れり。

と。道を知るは先づ我が果敢なきを知らねばならぬ。我が果敢なきを知るは自身を知るの第一歩である。これを知つて初めて吾等は人生の貴重なるをも會得するを得るのである。彼の徒らに醉生夢死し人生の眞趣味を解するに至らざる

自身を知るの第一歩

ものは、暗夜に深山に彷徨して何等の光明をも見出すことの出来ないもので、尊圓親王の

五月闇木の下道はくらきより

くらきに迷ふみちぞくるしき。

と咏ぜられたのは是等の儕輩を憐れまれたのである。

かくて吾等は我が身の無常なることを知つた。併しこれのみにては未だ充分に自身を知つたものとはいへぬ。此外に吾等は又我が身の微少なることを知らねばならぬ。吾等は生命に限りがある如く力にも限りがあるのである。仰けば天高く、俯せば地濶し。而して吾等は其幾分を占め得るのであるか、地球上人類十五億萬と稱す。然らば吾等は此地上の十五億萬分の一を占め得るか、

吾等の地上に占める所

一大海の一粟粒の

否いなな此この地上ちじやうに棲息せいそくするものは人のみにあらず、野のに驅かける獸けもの、木きに宿やどる鳥とり、地ちに這はふ蟲むし、水みづに棲すむ魚ぎよかい介かい、其その數すう、人類じんるいに幾いく億おく萬まん倍ばいす。而しかして此この地球ちきうは人ひとと動物どうぶつとのみを以もつて充みたされたのではなく、山さん嶽がくあり、田でん園えんあり、池ち沼せうあり、河か流りうありこれら陸地りくちに三はい倍ばいしたる海洋かいやうあり。吾等われらの地上ちじやうに占しめ得うる所ところは實じつに實じつに一小部せうぶ分に過すぎないのである。更さらに此この地球ちきうに光ひかりと熱ねつとを與あたふる太陽たいやうを見みよ。我わが地球ちきうの面積めんせきに一まん萬まん二に千せん倍ばいすと云いふにあらずや。されど此この太陽たいやうも亦また天界てんがいの一隅ぐうを占しめ得うるに過すぎないのであるから宇宙うちうの廣大くわうだいなるに比ひして我わが身みの微小びせうなるを思おもへば大海たいかいに浮うかぶ一粟粒ちほつぶよりも尙なほ小ちひさいものではないか、吾等われらは時間じかん的に限かぎりある如ごとく空間くうかん的に亦また限かぎりがあるのである。此この限かぎりある身みを以もつて限かぎりなき望のぞみを懷いだく、しかも見みんごする眼めには限かぎりあり。聽きかんとする耳みみには限かぎりあり。抑おさそ

行路難

道を求むるの動機

も此この有限ゆうげん微少びせうの身みを以もつて何事なにことをか成なし得うべき。我わが行路かうろは難なんにして我わが足あしは弱よわし、思おもはずんば止やむ、思おもうてこゝに至いたれば何人なんびとも身みの不ふ如意によういなることを感かんぜざるを得えないのである。併しかし吾等われらは全まったくこれらのごことを知しらぬのではない、知しつては居ゐるがそれを切實せつじつに感かんずることが薄うすいので、説教せつけう僧そうの語かたるを聞きかずとも、經典けいてんの教をしを待まちたずとも吾等われらはこれを知しつて居ゐるが、何なんだか他人ひとの事ことのやうに聞きいて居ゐるので、ヒシご自分じぶんの胸むねに中あたることが少すくない、これがヒシと自分じぶんの胸むねに中あたるの時ときは吾等われらは不安ふあんの念ねんの吾われに逼せまり來きたるを覺おぼえざるを得えない、此この不安ふあんの念ねんは、やがて彼かの道みちを求もとむるの聲こゑとなるので、古來こらい多おほくの人の道みちを求もとむるの動機どうきとなるのは、實じつに此この不安ふあんの念ねんに驅かられたのである。近親きんしんの死しによりて無常むじやうを觀くわんじ、身みの病苦びやくくによりて不ふ如意によういを觀くわんずるが如ごときは皆みなな此例このれいである。不ふ如意にようい不ふ自由じゆう

なるが故に如意自由を望み、無常有限なるが故に常住無限を求む、此人の情なり。情なりといへども知解の力によりて究めずんば此有限と無限、自由と不自由との關係を明にし難し。智識の王なり學術の總府たる哲學は抑も如何に此關係を示さむとする。吾等は暫く耳を哲學の云ふ所に傾けざるを得ない。

往古來今哲學者を以て稱せらるゝもの極めて多く、其説く所も紛々として歸一する所はないが、近世の思潮として何人も許容する所は現象即實在の説である。現象即實在といふのは吾等の眼に見る所の凡ての現象は悉く有限差別で不自由不完全且つ相對的のものであるが、其本體は無限平等で自由完全、しかも絶對的のものである。此絶對無限の本體と此相對有限の現象とは同一なもので異つたものでないといふのが立脚地である。チヨット聽くと、何んだか要領を

現象即實在説

吾等は宇宙の一部分

得ないやうであるが、よくよく考へて見ると宇宙の當體實に此くあるべきものである、何故かといふに吾等の身體は時間的にも空間的にも有限なものであるが、此有限なる身體は決して宇宙の外にあるのではない。上下四方を宇といひ往古來今を宙というて宇宙といふのは時間的にも空間的にも無限なものである既に無限であるから絶對全一で相對差別のものではない、相對差別のものではないが、又相對差別のものを容るるここの出來ない不完全不自由のものではない。されば此宇宙と吾等とは全く關係のないものではなくて微小なりといへども吾等は此宇宙の一部分である、一部分を缺けば宇宙を以て完全なるものといふことは出來ない。吾等の存否は直に宇宙の完不全に影響するのである。吾等と宇宙との關係は水と波との如きものである。波には生滅の相あれども其本體

平等一如

たる水は不生不滅である、しかも此水を離れて波なく、此波を離れて水なし、波たる現象は即ち水たる實在である。其波には怒濤あり驚瀾あり細漣あり小波あり、或るものは山の如くに動き、或るものは水沫の泡と消え千状萬態異種多様であるが、其水たる上より見れば悉くこれ平等一如、別に異りはないのである。宇宙の現象も亦又此の如く、千状萬態異種多様一として同じきものはないが、其本體よりいへば一つとして異なるものはない、我ごいへば乾坤只一人で、外に同じものは一つもないが、人といへば地球上十五億萬皆なこれ同一である同一の人にして別個の我、別個の我にして同一の人である。我であるから人ではないここはなく、人であるから我でないといふことはない。これ唯だ人の上にと就ていふのみではない、更らに此考察を廣めて動物といひ生物といひ物といふ

天地同根宇宙一體

萬物一體の理

に至ては天地同根宇宙一體、我と物と何の異なる所はない。試に眼前の茶碗を見よ。茶碗と我とは何の似る所もないやうであるが、此茶碗の體はこれ土、我れは土に養はれたる米を食ひて生存す、されば米は我が母にして土は米の母たりこれこの茶碗我が祖母たる土によつて作らる、然らばこれ我れと最も近き親戚の關係を有するのではあるまいか。哲學者は之れを名けて萬物一體の理といふ萬物は雷に其體に於て同一なるのみならず、其用に於て相互に密接不離の關係を持つて居るのである。我が此の書を稿するの筆は此の書とは密接の關係あるここはいふまでもない、既に此書と密接の關係あれば此書の讀者とは亦不離の關係があるのである。假りに此筆を以て兔毛に成れりとせよ。然らば野山に遊ぶ兔と此書の讀者とは亦不離の關係があるのである。此兔は草を餌す、

萬物相  
關の理

我が身  
の存否  
は宇宙  
の不完  
に關す

此草は太陽の光と地の土によつて養はれ、其太陽の光と其地の土とはと次ぎから次ぎへ考察してゆけば宇宙萬物が互に密接不離の關係を有するを會得することが出来る。更らに我身に直接なるものに就て考へよ、衣も食も住も他人の力に由り、自然の助けを受く、我を主として云へば萬象は悉く我に向つて働く如くに感ずることが出来る、これを萬物相關の理といふ。萬物互に密接不離の關係あり、されば我が一舉一動は直に宇宙全體に影響する大業ではないか能く此理を了解する時は我が身の微小なるを慨くの要はないのである。微小なりといへども、我は天地の一員にして宇宙の一部たり。しかも其一舉一動は直に全宇宙に影響し、其存否は直に宇宙の不完に關するのである。曾ては我が身の微小なるを嘆じたる吾等も學理の此説明によつて此身の偉大なるを感ずる

未だ安  
慰を得  
るに足  
らず

のである。

併し吾等はこれによつて安心を得るここが出来るか、學理の説明は玄を探り幽を闡くが吾等は唯だこれによつて宇宙人生の状態を知るのみである。唯だ知つたのみで、吾等の心にはまだ安慰を得ることは出来ないのである。或る人が幽靈のないといふことは科學の説明によつて充分之を知つて居るが、どうもさうとは思はれぬというたのは味のある言ではないか、幽靈といふものがないといふとは小學校の生徒でも知つて居るが、暗夜人なきに樹木の鬱蒼たる所を過ぎ又は満目荒涼たる墓地を過ぐる時には心に何となく恐れを懐く、これ何の故であらう、吾等の心は智のみを以て満足することの出来るものではない。智の外に情といふものがある。此情にも満足を與へねば心の落着くものではな

健全なる宗教は  
反科学反哲学  
なるべからず

い。此情に満足を與へるものは何であらう。こゝに於て吾等は科學哲學以外に宗教の必要を認めるのである。宗教といふものは精神全體の統一を得るもので單に情の上のみを語るのではないが、これを科學哲學の智の一面に流るゝ上から區分すれば情の方を主とするこゝが出来る。情の方を主とするこゝはいふものゝ、科學哲學の道理に背いては智の方が承知せぬのであるから矢張精神全體の統一を得ることは出来ない。それで健全なる宗教といふものは智の方面に於ては科學哲學のいふ所を承認すると共に、更らに一步を進めて情感にも満足を與へるのである。されば宗教は反科學反哲學であつてはならぬが、又科學哲學と同一のものではなく、科國哲學の及ばざる所に信仰の基礎を置くので、米國の博士ゼームスが「宇宙の絶對的眞理を標榜せる宗教の眞理は到底理智を

佛の慈悲の愛神

以て判断する能はず」というた如く超科學超哲學でなければならぬ。先きに學理の説く所によつて吾等は宇宙の一員にして吾等も宇宙とは同一體にして彼れは全體なり吾等は部分たるの差のみであると知り、吾等と宇宙萬象とは密接不離の關係あることを知つたが宗教の方では此の統一あり調和ある宇宙を以て直に神と感じ佛と見るので冷かに宇宙と吾等とは全と分との關係なりと見ずして果敢なき吾等も大なる佛の懷に抱かれつゝありと感じ、不如意なる吾等も神の御手に縋りつゝありと信じ、靈妙なる萬物相關宇宙調和の理法を觀じてはこれ佛の慈悲なり神の愛なりと思ふので、こゝに吾等は濫かく宇宙人生を見ることが出来るのである。併しかくいうただけではこれも亦た理窟であつて眞に宗教的情操といふことは出来ないが暫く理路を辿りていへば斯くいふことが出



須らく親參實究すべ  
宗教的情操

來るのである。云ふことは出來るこいふものゝ既に言説に墮つれば是れ第二義第三義で、究竟の味ひは云はんと欲しても云ふことの出來るものではない。僅かに松島の景でさへも芭蕉は「松島やあゝ松島や松島や」というて一句を吐き得なかつたではないか。僅かに吉野の櫻でさへ貞室は「これはこれはとばかりに花のよしの山」というて一字を賛することが出來なかつたではないか。況して宇宙の美天地の妙を感ず、何の辭を以て之を傳ふるこが出來ようぞ。須らく親參實究すべしで、唯だ自ら之れを味ふの外はない。心にヒシと身の果敢なきを感じ、仰で宇宙の莊嚴を味ふの時、吾等はおのづから敬虔の念の禁ずる能はざるものある。これ實に人心の秘奥に出でたる宗教的情操で何人もこれなきはないのであるが、唯だ充分に之れを味ふことが出來ないのに過ぎない。然ら

慧可大師の求道

ば如何にして此の妙趣を味ふべきかといふに、そはたゞ至心あるのみで、不誠實の心を以て得べきものではない。難寶藏經にいふ。道を求めんには須く精誠なるを要す。精誠相感せば能く道果を得んと、又曰く

行者は須く至心なるべし、若し至心ならば求むる所、必らず之れを獲ん。こ。達磨大師が初めて支那に渡つて、嵩山の少林寺に於て面壁九年せられて居つた時に、神光慧可大師は、法を師に求めんとて、少林寺に至られたが、達磨は之を許さなかつた、ソコで慧可は窓前に立つて時の至るを待つて居つたが時に大通二年臘月九日、雪は續紛として下り積んで腰を没し、寒威骨に徹す、私かに想ふ「昔人、道を求むる、骨を敲き髓を取り血を刺して饑を濟ひ髪を布

き泥を掩ひ、崖に投じて虎に與ふ、古尙ほ此の如し我れ又何人ぞ」と志を勵まして倦まず。達磨、黎明に及び之れを憐み問て曰く、「汝久しく雪中に立ちて何事をか求むる」と、慧可いふ、「唯だ和尙によりて道を得んとするのみ」と。達磨いふ、「諸佛無上の妙道は曠劫精勤して行ひ難きを能く行ひ、忍び難きを能く忍ぶべし、豈に小徳小智輕心慢心を以て得べきものならんや、これ徒勞のみ」と又顧みず、慧可は此教を聞いて求道の志いよく切に、終に携ふる所の利刀を以て左臂を斷じて達磨に示す。達磨これを見て「諸佛最初に道を求む法の爲めに形を忘る。汝今臂を我が前に斷つ求むると可なるものあり」というて爲めに教を説いたといふのである。道を求むるには此の至誠がなければならぬ。決して小智小徳輕心慢心を以て得らるべきものではない。これに就て面白い話がある。それは白山の南隱和尙の所へ或る理學士と文學士が、禪學の話が承りたいというて行くと、和尙は早速に之を座敷に通し先づ茶をついで出され、二人が未だ呑まぬに其上へつがうこなさる。それで二人が和尙満碗で入りませぬといふと、サウサ卿さん達の腹の中には理學や文學が充滿になつて居るから其上へ禪學をつぎこまうとしても入るものではない。禪のことが聞きたければ、腹の中のものを皆棄て、赤子の心になつてござれと云はれたさいふことである。これは此人達の輕心慢心を戒め道を求むる須く至心なるべしといふことを教誨せられたのである。宗教の信仰を得ようとするには此至誠の心が必要で少しでも輕慢の心が起れば如何に求めたからとて決して得らるべきものではない。

左臂を斷つ

南隱和尙輕心慢心戒む

わが身が暗き  
に法燈  
火の

修道講話

世を照らす光りは人をわかねども

わが身にくらき法のともしび。

で、若し至心にこれを求むれば、何れの所といへども道を得られざるはな  
い。基督の

求よ、然ば與られ、尋よ、然らばあひ、門を叩よ、然ば開かるゝことを得ん。  
蓋すべて求る者は得、尋る者はあひ、門を叩くものは開かるべければなり。  
といへるも、禪家の

無邊風月眼中眼

不盡乾坤燈外燈

柳暗花明十萬戸

敲門處處有二人應

といへるも、經に「光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨」

至心誠實

とあるのも其意は同じである。敲かずして門の開かるべきはなく、求めずして  
與へらるべきはない。至心を以て敲けよ、誠實を以て求めよ。この外に道を得  
るの法はない。

さて此の至心といふのは何であらうか、誠實の精神といふのは如何なるもの  
であらうか。智解の上から云へば萬物一體で、宇宙も吾等も異つたものでない  
のであるから我が心は即ち宇宙の心、宇宙の心は即ち我が心で、我が此の道を  
求むるの心はこれやがて宇宙精神の顯現と見ることが出来るのである。更らに  
情感の上から云へば、眞宗教要鈔に

信心とはまことのこころごよむなり。行者の方に起す故に我が心より起ると  
思へども、もと如來の御心よりおこさしめたまふなり。もし行者の心といは

求道の精神

まことの  
の心

ば偽り曲りてかたましければ、まことの心とは申し難し、如來のすぐなる御心なるが故に、まことの心は申すなり。

とも云ふことが出来る。要するに、吾等は心の奥の其又奥に佛と同じ性を有し宇宙大精神と脈絡貫通するの一道の光明があるのである。これを大我といひ眞我といひ、良知良能といひ、佛性といひ、先天内容の聲ともいふので、吾等は此一道の光明によつて宇宙の妙趣を感じ、こゝに確然不拔の信仰を立ることが出来、此信仰によつて苦惱なく煩悶なく人生の行路を進むことが出来るのである。道は遠きにあらず。脚下に大道横はり、心裡に靈光宿る。不幸にして吾等は有限差別の身に迷うて無限絶對の妙諦を免るゝ能はず。迷執、眼を翳して眞理の月を認むることが出来ないのである。若し夫れ此の迷執を打破して我

一道の光明

道は遠きにあらず

請ふ摩尼珠の靈光を探らん

が心垢を洗滌せんか、我を導く一道の靈光は常に輝き渡るのである。

摩尼珠人不識

如來藏裡親收得

(證道歌)

請ふ此摩尼珠の靈光を探らん、これ次ぎに語らんとする安心の關鍵である。

## 二 安心の關鍵

神祕の塊

心の妙……主人公……靜坐冥想……罪惡の自覺……懺悔……自ら救ふの力……歸家穩坐……人類の權利……一念裏……自然の要求……大道現前……罪性不可得……弱き力……強き信仰……那先比丘……懺悔と信仰

天地は不可解の顯現にして宇宙は神祕の塊であるが、この宇宙を考へ、天地を察せんとする人の心も亦實に不可思議のものではないか。

大なる哉心や、天の高きも極むべからざるなり、心は天の上に出づ、地の厚きも測るべからざるなり、心は地の下に出づ。(榮西禪師)

で、本は遠く三千八百萬里外の太陽を觀測し、尙ほこれに數千萬倍せる遠距離の星辰を考察すべく、小は一羊毛頭の一萬六千八百〇七分の一たる極微をも言

あやしきものは心なりけり

心は辻堂の如し

説し得べく、高邁の志、一たび起れば聖人君子の地位に分け入り、佛菩薩の境に進むべく、鄙吝の念一たび萌せば忽ち惡魔の群に陥りて鬼畜と其列を同らすべし。

うつりゆくはじめもはても白雲の

あやしきものは心なりけり。

昨の是は今の非となり、朝に好みしことも夕にはこれを憎み、意馬心猿狂うて止まらざるは吾等の心である。吾等の心は何故に斯く定まらぬのであらう。悪いことばかりでなく、偶には善いことも考へるのであるが、水に浮ぶ泡の如く且つ消え且つ結ぶ、石平道人は吾等の心を喩へて辻堂の如しといはれた。荒涼たる山路に一つの辻堂がある、雨を凌ぐが爲めには高位高官の公達もここに

安心の關鍵

此辻堂  
人にば主  
いが無

主人公  
を見世  
すむ心  
を修む  
初め

宿ることあれば、乞食非人もこゝに止ることあり。孝行娘の休み場所ともなれば、盜賊の隠れ家ともなる、善悪邪正さま／＼のものが入り込むのである。吾等の心も亦此くの如きものではないか、此辻堂には何故かくさま／＼のものが入り込むのであらう。云ふまでもなく此辻堂には主人がない。主人がないから何人も入り込むことが出来るのであるが、假令九尺二間の裏長屋、賤が伏屋の詫住居でも何某の家であるに定まつた主人があれば、無暗に入り込むことの出来るものではない、此辻堂に主人がない如く吾等の心にも亦主人がないのである。主人がないからさま／＼の念慮が起り、いろ／＼と迷ひに迷ふのである。此主人とは何であらう。前にいうた大我といひ眞我といひ良知良能といひ佛性といふもので、此主人公を見つけ出すのが心を修むるの初めである。中江藤樹

佛性徹  
見の關  
鍵

主人公  
其姿を  
現す

も亦曾て書を人に與へて、「心裏面に常住不息の良知の主人公御座候、この君に對面なされ工夫御勤めに候へば、何時となく浮氣除き申すべく候」というて居る。此主人公に對面するといふことが何よりも必要なことである。さて此主人公對面に就ては是非靜坐瞑想の取次を頼むの外はない。靜坐瞑想實にこれ佛性徹見の關鍵で、これによつて吾等は心の奥に潜める眞我の靈光を認めることが出来るのである。一室人なく萬籟寂たる時、靜かに自己の過ぎ越し方を想ひ、又行く末を考へ見よ。いひ知れざる悲哀と寂寥とを感じ、身の微小にして無常なると共に其又罪惡多きを自覺せでは止まないものである。我は實に爲すべきを爲さず、爲すべからざるを爲したるここの多かりしよ、大なる哉、過深き哉、罪。一念茲に至れば心裡の主人公は當面に其姿を現し來りて、我を叱し、我を

安心の關鍵

罵り、我を責め、我を鞭ち、我は其呵責に耐へずして煩悶苦惱、善導大師の所謂

自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁あることなし。

と、自覺し痛歎措く能はざるものあるに至るのである。此くの如くに罪惡を自覺するに至るは是れ既に自己本來の主人公に對面して居るので、無限の靈光は既に閃めき初めたのである。自ら罪惡の凡夫なりしを覺り、痛切に我が身の罪多きを感じ、心にヒシと從來の所業の惡かりしを慨くの時、救濟の手既に汝の頭上に下つたのである。塵なしと思ひたればこそ拭ふべき道も講ぜざりしが一旦塵ありと知りては拭はでおかざるべき、罪なりと知らず惡なりと思はされ

懺悔

ばこそ、罪に罪を重ね惡に惡を増したるなれ、今其罪たるを知り惡たるを感ず誰か再び之れを犯さんとは思ふべき、復び犯さじと決意するの時、其塵は拭はれ其罪は去られたのである。これをこれ懺悔といふ。至心懺悔するの時、衆罪は草の葉に置く露の如くに消えて清淨の本來に立ち歸るのである。觀普賢行法經に

一切の業障海は、皆な妄想より生ず、若し懺悔せんと欲せば端坐して實相を念ぜよ、衆罪は霜露の如く慧日能く之れを消除せん。

と云はれたのも此道理に外ならぬのである、さて此懺悔に二類ある、一つは自己の罪惡を知ると共に其報いを恐れて懺悔するもので、これは自利的の改過で眞の懺悔といふことは出来ない、自ら犯せる罪は自ら其報を受くべきもので臆

懺悔の二類

病にも卑怯にも之れを免れんとするが爲めに悔い改めたりとて何の功もあるべきではない。こゝにいふ懺悔はかかる自利的のものにあらずして罪惡其者を憎み罪惡其者を恐れての改過である。何が故に罪惡其者を憎み且つ恐れるか、それは吾自身を自覺するに由る。我も佛も聖人君子と同一なるべきに、如何にすれば斯くも迷ひに迷ひしぞと感ずるの時油然として起る改過の心なり。これこの心直に佛と手を携へ聖人君子と肩を接することが出来るので、心地觀經に若し能く如法に懺悔すれば、あらゆる煩惱悉く皆な除くこと猶ほ劫火の世間を壞り、須彌の巨海を焼き盡くすが如く、懺悔能く煩悶の薪を焼き、懺悔能く天路に往生す、懺悔能く四禪の樂を得、懺悔能く寶摩尼珠を雨ふらし、懺悔能く金剛壽を延し、懺悔能く常樂の宮に入り、懺悔能く三界の獄を出で

懺悔の功德

懺悔の精神復活

懺悔の幸福

懺悔能く菩提の花を開き、懺悔能く佛の大圓鏡を得、懺悔能く寶所に至る。ご激稱したのは此の懺悔である。されば懺悔は一たび離れたる佛と近づき塵埃を洗滌して本來清淨の面目を現じ、舊生活を棄て、新生活に入るので、言はば精神上の復活であり更生である。失はれたるよりはこゝに求められ、棄てられたるよりはこゝに救はるゝのである。懺悔は自ら救ふの力なり、人は此力なくして到底其靈能を發揮することは出来ないのである。

懺悔することを得るは吾等の幸福なり。人誰れか、鐵板を見て其光なきを咎めむ。彼れもと光なきものなればなり。人誰れか鏡面を見て其曇りたるを咎めざらむ。彼れもと光あるべきものなればなり。吾等が心の曇りを自覺するは本來光りあるべきものなるが故で曇りを自覺するは本來の性に背きたりしを知る

安心の關鍵



佛の位

ので此曇りを拭ひ去るのは本來の性に歸るので禪家の所謂歸家穩坐である。即ち狂ひ出でたる迷路を棄てて本來の家に歸り穩かに神の懷に坐し、佛の攝護に浴するので、凡ての罪は拭はれ、凡ての悪は除かれ我は清淨潔白の身となるのである。これをこれ佛の位といふ、梵網菩薩戒經に

汝是當成佛 我是已成佛 常作一如是信 戒品已具足

衆生受二佛戒 即入二諸佛位 位同二大覺已 眞是諸佛子

汝は此の當成佛

佛戒

とあるのは此事をいうたので、汝はこれ當成の佛、我は是れ已成の佛云はれた如く佛と吾等とは少しも異つたことはない。其異なる所は自ら佛と同じ位に入るべきものなることを知らぬので、これを知りこれを信じて毫も疑ふことなくんば吾等は直に諸佛の位に入り諸佛の御子となるこゝが出来るのである。こゝ

如來藏 摩訶寶珠

に佛戒とあるのは佛性戒ともいふべきことで古人も「これ一切佛の本源、一切菩薩の本源、佛性の種子なり、一切衆生皆な佛性あり一切の意色識心是の情是の心あるは皆な佛性戒の中に入るべし」というて吾等の心中に閃めき渡る靈光を指したのに外ならぬので、即ちこれ如來藏裡に收得せられたる摩訶寶珠である。吾等の心に此靈光あり此寶珠あり以て佛たり菩薩たり聖人たり君子たるの資格を有するので、これ實に人類平等の權利にして天才あるものにあらずんば得る能はず智能あるものにあらずんば得る能はずといふやうな偏頗なものではない。宇宙は公平なり神の恩寵に私なし。唯だ至心懺悔することに於て此境に到ることが出来るので、若し夫れ懺悔の心なく罪に罪を重ね惡に惡を増さんか上りて佛たり菩薩たるべき吾等も、下りて鬼畜たり惡魔たることを得るので

此間亦私なく偏頗なし、露伴子曾て「靄護精舍漫筆」に於て此消息を傳へて曰く

汝は是れ當成佛、我は是れ已成佛と菩薩戒經に説かれたり。露伴は是當成佛、瞿曇は是已成佛、露伴は是當成聖人、孔子は是已成聖人、露伴は是當成詩人、沙翁顯悦は是已成詩人、嗚呼快なる哉、唯明人忍慧強く能持如是法にして初めて佛ともなるべく聖人とも詩人ともなるべし。恨むらくは露伴忍慧弱く、不持如是法、羊は是已成畜生、露伴は是當成畜生、炎口は是已成餓鬼、露伴は是當成餓鬼なることを、大丈夫滿腔の血、順流逆流、乃至鬱滯不流潰裂逆飛すべきところは、此快恨二字打成一丸裏にあり。と。「天路歷程」の著者バンヤンも曾て囚人の獄に牽かるゝを見ていふ「予にし

快恨二字打成一丸

佛を招くの聲

て神を信することなくんば彼の囚人は必らず予なりしならん」云、苦樂昇沈迷悟善惡、凡聖賢愚、眞に汝の一念裏にあり。其進むを想うては誰か欣然として喜ばざるべき、しかも其墮するを想うて、誰か肅然として恐れ悸かざるべき。嚴正なる哉、宇宙の默示、整然たる哉、天地の妙理、其進むを勵みて墮するを慎み、日に日に新たにして又日に日に新たなれば、神に近づき佛に接することが出來るのである。進むは神に近づき佛に接するなり、墮するは神に遠ざかり佛に離るゝなり、佛に離れ神に遠ざかりて、吾等の心性は罪より罪に、惡より惡に陥りて永劫浮ぶ瀬なき奈落の淵に沈むのである。何の幸ぞ吾等の心には靈の閃めきあり。眞を好み善を愛し美にあこがる。これ實に神を呼び佛を招くの聲なり。さゝやかなる眞理も之れを求め、小さき善をもこれを愛し、露に

安心の關鍵

宿る月影にさへ其美を思ふ、況してや宇宙の大靈、天地の妙趣に對してをや。吾等の心には自然に此要求あり、此要求がやがて改過の念となり遷善の心となり罪惡を洗除して佛位に入るの懺悔ともなるので、此懺悔が即ち前にいふ佛たるべき要素である。

我は即ち是れ如來藏の義、一切衆生に悉く佛性ありといふは是れ我の義なり。此くの如く我の義に本よりこのかた常に無量煩惱の覆ふ所となる、此故に衆生は見るを得る能はず。(涅槃教)

と、見るを得る能はざる我の本性今まこれを見たり。佛性の光輝は鮮やかに一切の罪惡を淨め去つたのである。一切の罪惡淨め去れば宇宙の大道は我が前に現はれ来る。

無明實性即佛性

幻化空身即法身

法身覺了無一物

本源自性天真佛 (證道歌)

罪を持ち來れ

で、廓然として大虚に等しく身は全く佛陀慈光の下に包まるゝので、何の罪惡の存すべきではない。僧璨大師、曾て慧可大師に參じて、弟子身風恙に懼る請ふ和尚罪を懺したまへといふと、師は直に「罪を持ち來れ汝の爲めに懺せん」と云はれた、僧璨は良久しくして「罪を覺むるに不可得なり」と答へられた。スルト師は「我汝の爲めに罪を懺了る」と云はれたといふことがある。罪を覺むるに不可得なれば懺するも懺せぬもあつた筈ではないが、吾等は未だ此境涯に至らぬのであるから暫く懺悔の必要を説いたのであるが、究竟の極致は罪性不可得の境涯に至り本源自性天真佛に歸らねばならぬのである。既に此境に

前大道現

入れば一言一行佛作佛行、求むる所悉くこれ眞、行ふ所悉くこれ善、念ふ所悉くこれ美で、大道現前、少しも離るゝことではない。孔子いふ、道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらざるなり。我と宇宙の大道と一體不離となる。これぞ吾等の望む所の生活であるが、これは唯だ罪惡を自覺し復び之を犯さじと誓うたゞけで直に到り得ることの出来る境涯ではない。此誓ひによりて吾等の罪は淨めらるゝのであるが、果して吾等は此の誓ひを何時までも守ることが出来るであらうか、誘惑多き此世の中に於て吾等は常に惡魔に魅せられ煩惱に味まされ見聞し覺知する所のもの皆我が敵となつて現れ來るので、大勇猛の力を以て之れと戦はねば、よし一旦は懺悔の力によりて清淨の身となりたればとて直に舊態に復するのである。さて

如何に罪に勝つべし

吾等は果して此の大敵と戦ふの勇氣があるであらうか、吾等の心は動き易く吾等の思ひは狂ひ易し、此狂ひ易く動き易き心を以て執拗に付き纏ふ罪惡と戦ふのは到底力及ばぬのである。力及ばずとして退けば魔軍は跳梁して我は懺悔せざる昔と同じこととなるのである。されば如何にして此罪惡に打勝つべきか。他なし、唯だ吾等以上の力を信することによつて我を魅し我を味まさんとする百萬の大敵にも對することが出来るのである。しばし如く信仰は力なり人は空手にして猛獸に敵するこゝは出来ぬが我れに銃あり劍あり以て能く彼れを斃すことが出来るが如く、此力によつて吾等は罪から免るゝことが出来るのである。彌蘭王が曾て那先比丘に問ふに「人のこの世にある百歳まで惡を作るも、死に臨むの時、念佛すれば死後天に生ずる、我れ之れを信する能はざるな

信仰の必要

り、又一衆生を殺すも死して地獄の中に入ると、我れ又これを信する能はざるなり」と、那先比丘、王に反問していふ「若し人小石を持ちて水上に置かば、此石浮ぶべきや將た没すべきや」と、王答ふ「その石没せん」と、那先又問ふ「若し百枚の大石を持ちて船上に置かば其石没するや否や」と、王いふ「没せざらん」と、こゝに於て那先、王に告げて曰く「船中の百枚の大石は船に由るが故に没することなし、人に本惡ありとも、一時念佛せば、これを以て地獄に入らずして即ち天上に生ずべし、船上に置かざる石は小なりとも没す、人若し惡を作りて佛教を知らずんば死後即ち地獄に入らん」と、この一話は能く信仰の必要を示したものではないか。信仰なき懺悔は決して切實なものではない。人に對つての懺悔には幾許かの虚偽あり辯護あることを免れぬ、假令何程なりこ

懺悔の虚偽

も虚偽あり辯護あれば未だ以て眞の懺悔といふことは出来ぬ。眞の懺悔は至心にこれをせねばならぬ。至心誠實の懺悔には是非此信仰がなくではならぬ。此信仰あつて懺悔に功あり、此懺悔あつて信仰に力あり、此功によつて滅罪清淨なるを得、此力によつて復び墮落するこそを免るゝのである。彼の禁酒を人に對つて廣告するものゝ僅かに旬日ならずして「我が禁酒破れ衣となりけり、さあさしてくれさあついでくれ」となるのは此信仰がないからである、神に誓うたものゝ破らないのは此信仰があるからである。此信仰の亂るゝ時は即ち此禁酒の破るゝ時である如く信仰あつて初めて懺悔が永續するのである。懺悔が永續してゆけば我れは常に清淨で、心裏の摩尼寶珠は不斷に其靈光を顯現し我れは佛と伴ひ神と手を携へて樂しき生活を營むことが出来るのである。即ち

安心の關鍵

一 吾等は無限の時間を貫き無限の空間に亘れる宇宙の本體を以て直に神なり佛なりと爲し、其妙趣を以て神の顯現なり佛の靈光なりと信ず。

二 吾等は此神此佛を以て眞善美の圓滿具足せるものと信じ、吾等も亦此神の性、佛の徳を具ふることを疑はず。

三 吾等はよし偽惡醜に滿つるとも、一たび此罪惡を自覺するここによりて神の列に伍し佛の位に入り得べきことを信じ、此信仰の確立を以て道ある生活を營み得べきことを疑はず。

併しこれだけでは未だ言ひ盡くし得たのではない。先きにもいふ如く信仰は直覺に基くもので、文字言説を以て示すことの出来るものでないから理論の上から明にせんとすれば、隔靴搔痒の嘆を免れぬ。尙ほ後々に説く所によりて

信仰は  
直覺に  
基く

會得せられんことを望むのである。

### 三 修養の道程

誘惑……降魔……心内の紛亂……良心の閃光……罪惡の根本……人空法  
 空……懺悔の方法……焉直進前……魔軍大敗……心内平穩……自ら克つ  
 ……習慣の力……轉心法……修養の三階級

雨、過ぎて山更らに青く、風、止みて樹殊に靜なり。吾等の心も煩悶苦惱幾多の試練を経て、志眞に堅きを得るので修養の道程には此風雨を免るゝことは出来ないのである。基督はヨルダン河畔風清き曠野に惡魔の誘惑を卻けて、救世の大使命を自覺し、釋尊は菩提樹茂れる佛陀伽耶に魍魎、惡鬼、羅刹、夜叉と戦うて大千世界を晃耀するの大光明を放ち玉ひ、餘光今も吾等を照らす。如く、吾等も亦修養の道程に於て此試練を経て、

修養の道程

修養を妨ぐる惡魔

心地上、風濤なければ在るに隨て皆青山綠樹、性天中、化育あれば處に觸れて魚躍り鳶飛ぶを見る。  
 (菜根譚)

の境に到らねばならぬ。吾等が修養を妨ぐる惡魔とは何であらう、魍魎、惡鬼羅刹、夜叉とは如何なるものであらう、これらは決して外にあるべきではない。吾等の心中に其居城を構へ縱横自在に其軍を行き我れを迷はし我れを苦むるの煩惱、吾等が一念裏に潜みて密かに跳梁の計を策する罪惡である。此煩惱を制し惡魔を伏せずんば吾等は到底佛の位に入ることとは出来ないものである。如何にして之れを制し之れを伏すべきか、此事に就ては夾山無碍禪師の作られた。降魔表によつて説明するのが最も便利であると思ふ。(降魔表の本文は拙著冥想論に解し難いと思ふから、こゝには一々本文に就て講) 此表は平和克復の後に將軍が戦争

降魔表

修養の道程

の経過を天子に報告する文體に擬して修養の道程を示したので文章頗る流麗である。

冒頭には

臣聞く三乗路廣うして、法界涯りなく、智海晏靜にして十方安泰なりと筆を起し、次に

時に魔軍あり、競ひ起つて心田を侵撓し、六賊既に強く心王驚動し朝に百怪を生じ、夕に千邪を起し、眞如を撼惑し、法體を困勞し、菩提の道路隔絶して通ぜず、涅槃を破壊し、三寶を傷殘し、無爲の珠玉、悉く偷將せられ、大藏の法財皆な劫奪に遇ひ、塵勞日を翳して慾火天に亘る、法城を飄蕩し、聖境を焚燒す

敵軍の情勢

三乗

小乗

大乘

佛敎の二大區別

と書いて敵軍の情勢を報告し、それより漸次味方の戦略を示し、終に此強敵を殲滅した次第を記したのであるが、先づ今挙げた本文からザット字義を講ずることにしよう。最初に三乗路廣うしてとある三乗といふのは、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三を指すので、此三つは共に一切衆生をして迷ひの此岸から悟の彼岸に渡す乗り物の如きものであるから乗といふので、同じ乗り物でも聲聞と緣覺とは小乗さういうて自分一人の悟ることを主として他を悟らすといふことを考へないのであるから自轉車位なものであらうが、菩薩乘といふのは自分ばかりが悟りの岸に渡るのみではなく、他の人々をも渡さうとするのであるから汽車や汽船の如きものである、之れを大乘と爲すので大乘、小乗は佛敎の二大區別で、こゝに三乗とあるのは佛敎全體を指したのであると解してよい、抑も佛敎の道



理は宇宙を達觀し人生の歸趣を定めるのであるから、廣大無邊で豎に三世に通じ横に十方に普く、其赫灼たる光明は如何なる所をも照さざるはない。此故に涯りなき法界寧靜で天下太平國土安穩、時つ風枝を鳴らさぬ狀況である。これを智海晏靜にして十方安泰なりというたので、智海晏靜というたのは、我が心に一點の迷ひなく、本來本性、天然自性心、本有の佛性其靈光を放ち明皎々として毫も曇りのない吾等が固有の心を指したので、此心曇りなく塵なきの時まごころにこれ十方安泰である。一時に魔軍あり」で、此清淨潔白なる本性の上へ忽然として迷ひの雲起りて月の如き靈光は全く味まされ太平無事の心田を侵撓し、眼耳鼻舌身の向ふ所、意の思ふ所悉く迷ひの種となりて此六賊の勢ひ猛烈に愛慾の念憎惡の感いよいよ募りて心王を動かして朝に百怪夕に千邪

妄念の跋扈

を生じ眞如を撼惑して眞理の光影暗く法體を困勞して法性の體現はるゝ能はず吾等の心は全く妄念の跳梁跋扈に任せ、菩提の道路隔絶して通ぜざれば些毫の善心も起るに途なし、正にこれ鐵路破壊せられ電線切斷せられたるが如く味方は頼むに法なき状態で、眞善美、圓滿具足の境なる涅槃の都は潰され、教化の力となるべき佛、法、僧の三寶は傷られ、人々個々分上ゆたかに具へたる佛性無爲の寶玉は偷み去られ、修養を助くべき大藏の法財は劫奪せられたので、聖人の教化知るに由なく、煩惱の塵勞は盛んに起つて黒雲重疊日月爲めに其明を失ひ心性の本體全く其輝きを示さず、愛慾の火は焰々天に漲り、味方の領土たる法域は魔軍の大勢に靡かされ、聖人の境は全く焚き盡さる。これ實に人生の墮落を譬喩したもので、吾等が一念惡に向ふの時、初めは線香頭上の火の如く

入生の墮落

いと微かなるものなりつれど、終には我が良心を焼却するに至るものである。奈何にして此魔軍に應すべき、敵勢此くの如し、味方も亦戦闘準備なかるべからず。文は前に續きて、

臣乃ち斯くの如きの暴亂を見て、佛法以て存し難きを恐れ、遂に六波羅密と商量し同じく剪滅せんとし、性空を遣はして密使を爲し、魔軍を聽探し見るに、今五蘊山中に屯在して八萬四千の餘衆あり、既に體勢を知る。計利那にあり。

六波羅密

斯くてはならじと反省一番し直に魔軍討滅にかゝるので、これ自己良心の閃光である、先づ第一に協議を凝らしたのは腹心の六大將である、これを六波羅密といふ。波羅密といふのは梵語で、支那に譯して到彼岸の義とし又渡の意と

布施 持戒 忍辱 精進 禪定 智慧 性空

するので、即ち迷ひの此岸より悟の彼の岸に渡る舟筏となるべき者である。此六つといふは第一は布施にて慈善の義、第二は持戒とて佛の戒めを守り聖賢の教誡を遵守し宇宙の規律を重んじてゆくこと、第三の忍辱これ忍耐の義、第四は精進、これ努力勉勵の義、第五は禪定とて靜思熟慮すること、第六は智慧とて正しき知識で、皆なこれ惡を止め善に向ひ、迷を去り悟に就ての總指揮官である。これら指揮官と共に開かれたる參謀會議の結果は敵狀偵察として性空なるものを使はすこととなつた。此性空といふのは佛法の原理で魔軍討滅に最も力あるものである。何故かといふに、元來煩惱の根本は我他彼此の念にあるので我も彼も同一なりと信ぜば我を愛する如く他を愛し此れを思ふが如くに彼れを思ふことが出来るのであるが、本來同一の性を有しながら差別の惑を抱きて

我を愛し他を憎み此を好み彼れを憎む。此我見が一切罪惡の本となり、我れの愛するものは之れを得んと欲して饑貪の念を起し、我れの憎むものを見ては之れを遠ざけんと欲して瞋恚を生じ、罪に罪を重ね惡に惡を増すに至るのであるから、佛敎にては先づ此我見を打破するを以て要として人空の説がある。この説によれば我を分析して眼耳鼻舌身等の形體を指すの色と此の眼で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味ひ、身で觸るゝことを心に受け込む受と、受け込むに就て起る所のさまざまの想ひ即ち想と、これが本となつて身を動かさし、口を動かさし意を動かしてゆく行と思慮分別する作用たる識との五とし、此の五の中第一の色は身體、(これは地、水、火、風の四大より成るこいふ) 後の四は精神、これを五蘊こいふ (蘊は積集の義) 此色、受、想、行、識の五蘊が集つて我とい

ふものを形成して居るので、これを外にして別に我なるものゝあるのではないこいふので科學的にいへば我はこれ元素と元素との集合、この外、別に我あるこいなしといふと異らぬのである。併し佛敎の空を説くは之れのみではない、更らに法空の説を立て、我は唯だ五蘊の集合に過ぎないというたが、其五蘊とても實にあるべきものではない、といふと終に一切皆空の道理を示して宇宙萬象は因縁によりて現はるゝ假りの相にして其實あることなしといふに至るので、心地觀經に所謂

水中本來月影なし、淨水を縁として月を見るのみ。諸法は縁より生じ、皆なこれ假なり、凡愚、妄計して以て我と爲す

とあるのもこれである。若し能く此道理を會得したならば罪性不可得と悟了す

ることが出来、白刃頭上に下るの時も、

四大元無主

五陰本來空

將頭臨白刃

猶似斬春風

(僧肇法師)

といひし高僧の覺悟を得ることが出来るのである、ソコで魔軍偵察の任務を此性空に命じて其狀況を探らせて見ると、果然、賊は五蓋山中に屯在して人我の執着を持し、其勢八萬四千騎といふことが明かとなつた、計、刹那にあり、兵は迅速を貴ぶ。

遂に十八界の雄兵を點じ並に體空を立て、號と爲す。人々無礎の力あり。個個勇健の能を懷く、直心見性の功を爲し、一正百邪の亂を去る。堅固の甲を擯き、三昧の鏘を執り、智の箭、禪の弓、光明の慧劍を大乘門中に向つて訓

練し寂滅山内に安營し、三明嶺上に旗を開き、八正路邊に排布し、大覺性を遣はして捉生の將と爲し、四方に遊歴して妄想の踪を捜求し、無明の蹟を抄截す。復た慈悲王を使はして三毒の塞を破り、忍辱の師、瞋怒の城を伐ち、精進の軍、傲慢の妖を除き、喜捨の士、慳貪の賊を捉ふ、遂巡して魔軍大に起り殺氣天を衝く。

十八個師團の兵は點檢せられた。十八界といふのは形體上の眼、耳、鼻、舌、身、意これを六根といひ、これが對境たる色、聲、香、味、觸、法これを六境といひ、これを認識する眼識、耳識、鼻識、舌識、意識これを六識といひ合せて十八界と爲すので主觀客觀すべての境界である。既に此の十八師團の雄兵を點檢し、我見の敵なる體空を以て、旗印とした。體空といふのは無といふ意

味ではない鏡の明にして一點の塵なく、しかも能く萬象の影を宿すが如く宇宙平等の本體が魔軍討滅には最も適當な號である。この本體空の理を覺れば何の所にか罪惡の萌すべき。さてこれらの兵士は悉く皆な忠勇義烈で、人々無礎の力あり、個々勇健の能を懷き、驀直に敵き破つて佛性徹見の功を立てんとし、一正百邪に當る一騎當千の勢ひである。其又服裝はといふに道心堅固の甲を擐き、三昧と一心不亂の鏘を執り智慧の箭に、禪定の弓大光明大智慧の劍を大乘門中に訓練し、無上甚深微妙の大乗佛法の力を以て偽惡醜なき寂滅山中に陣所を構へ、自由自在の作用を現する三明嶺上に義軍の旗を押し立てたり（三明といふのは佛の神通力を指したので宿命明にて宿世の運命を明め、天眼明とて吾等の見能はざる所を見、漏盡明とて一切衆生の盡くし難き煩惱をも殲滅する

三明

八正道

のである）かくて八方に軍を列らねたこの八方は即ち八正道で、轉迷開悟の道途なる正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である、此八道に兵を列べ、大覺性即ち佛性を以て兵に將として敵將捕獲の任務を帯ばしめ、四方に遊歴して煩惱妄想の遁けゆく踪を探り、無明の跡を截ち切り、無明煩惱をして連絡の途なからしめ、又一方には慈悲王を使はして貪瞋痴の立籠れる三毒の要塞を破り忍辱の師をして瞋怒の城を伐ち、精進の軍を以て傲慢の妖を除き、喜捨とて慈善の行ひあるの士をして慳貪の賊を捉ふることとし、各部署を定めて旗鼓堂々として進んだものであるから魔軍はしばし逡巡しが、かくてはならじと大に起つて兩軍入り亂れ戦争今や酣にして殺氣天を衝くの状態となつた。ソコデ

臣乃ち摩訶を部領し、一時に齊しく入る、爾の時に當つて眼に色を觀ず、耳に聲を聽かず、鼻に香を嗅がず、舌味を了せず、身、觸を受けず、意、攀緣せず、志を一にして向前し、念々退かず。

摩訶

摩訶は大の義、こゝでは大般若即ち絶對智のこゝこである、今これを引率して突貫を試み猛然として敵の重圍の中に入り、これ此時、我なく人なく、外境の我を惑はすなく、内心妄想の起るなく、無念無想、唯だ進むを知て退くを知らず、元の大軍我が國に寇せし時、無學禪師が北條時宗に向つて驀直に進前し回顧することなかれと喝破せられたが如く一心不亂の勢ひである。吾等が心内は一大戰場、須らく此學悟がなければならぬ。石平道人いふ「洒落佛法ぬけがら坐禪は何の用にもなるまじきぞ、眼をすゑ齒をかみしめ、かたし眼になりて、

洒落佛法ぬけがら坐禪

魔軍敗北の状況

むらがる敵の中に躍り込み、敵の槍先に突立たる覺悟もて修行せよ」と、今は此勢ひなり、敵軍何ぞ能く之れに當るべき。

倏忽にして魔軍大に敗れ、六賊全く輸く、殺戮無邊掃除蕩盡し、妄想を生擒し、無明を活捉す、領して涅槃場中に向て慧劍を以て斬て三段と作す、煩惱の林當時に摧折し、人我の山化して微塵と作る、痴愛の網は智火に遇うて焚焼し、邪見の林は慧風に吹き塌さる。

こはこれ魔軍敗北の状況妄想も無明も生擒せられ、眞善美の涅槃城中、智慧の劍を以て偽惡醜の三を斬り、煩惱の林も人我の山も微塵に摧折せられ愚痴愛憎の鐵條網も今は焼き盡され邪見の林は吹き塌されて迷妄の雲全く散じ眞理の光は輝きて、吾等は又本來の清淨に歸ることが出來たのである。

四智 大圓鏡 平等性 妙觀察 智成所作

茲に因て三明再び朗らかに、四智重ねて圓かなり、内外瑕なく、廓然として清淨なり、心王歡喜の殿に坐して、眞如解脱の樓に登り、自性無碍の堂に遊び、三身法空の座に踞す、これより法界寧靜にして、永く囂塵を絶ち、共に生死の河を渡り、等しく菩提の岸に到り魔軍既に退く、合せて具さに奏聞すと結んだ、これ心内平穩に歸つたので四智といふのは佛の智慧で、其の狀恰かも大圓鏡の何物をも映さざるなきが如く、一切萬法盡く其上に現じて、しかも鏡を汚さざるが如きに喩へて第一を大圓鏡智といひ、第二を平等性智といふ、これは森羅萬象差別の當相も其本皆な平等一如なりと知るの智で、さて其平等一如のものが萬象差別の相を現じ各自其用を爲してをるのを明かに見分くるを第三の妙觀察智といひ、物に應じ機に隨うて應用自在なのを第四の成所作智と

自ら克つて初めに克つべし

いふ、これらの事今は明かに心の内外一點の瑕なく、廓然として清淨なるが故に心王は歡喜の殿に坐して眞如の月は解脱の樓に上りて本來自性清淨にして碍りなき堂に遊び、法報應の佛の三身は法空の座に居りたまひ、天下泰平國土安穩法界寧靜にして、最早や塵も起らず、吾等は生死の河を渡りて等しく菩提の岸に至り魔軍は全滅してしまつたといふのである。文は簡であるが意は深い。吾等が修養の道程には此試練あり此誘惑あるを免れぬのであるから常に自ら克つの工夫を凝らさねばならぬ。自ら克つて初めて人に克つことが出来る。人生は一大戰場である。薄志弱行自ら克つことの出来ないものゝ到底起つことの出来るべき所でない。

さて此自ら克つといふは頗る至難のことに似て居るが、そは其當初に於ての





至心誠實

吾等は終に神と伍し佛と伴ふの境に至り得るのである。唯だ其法の如何によらず至心誠實なるを要するので至心誠實だにあるならば修養の道程は無事に經過することが出来る。不幸にして一ひ此至心誠實を缺かんか、救はるべき身も棄てられ、進むべき心も退き、我は終に人の人たる靈能を發揮することを得ざるに至るものである。此至心誠實に次ぐべきものは決定の意志である。至心に「悪かりし」との自覺起りたればとて斷じて悪を作さじとの決定心なくんば、其自覺も雲烟過眼で、何の效もない。この決定の意志あつて始めて自覺の效はあるのである、併し此決定の意志あるとも之れを繼續するの心なければ、一二日にして廢し三四日にして止め充分なる習慣を作ることの出来るものではない、されば修養には至誠心、決定心、相續心の三つを缺くことが出来ない。此三つあ

決定心

相續心

つて初めて心の欲する所に従つて矩を踰えざる境に至ることが出来るのである。

### 四 宇宙と人生

宇宙の大道……唯物と唯心……王陽明……近世哲學の傾向……汎神觀……  
 ……人格の感化……個人の本務……遁世脫俗主義……許由……動中の修養  
 ……現世輕賤主義……來世の要求……自殺論……武士道……平常心是道  
 ……實行を貴ぶ……我が宗教

修養其功を積みて妄想の我が心裏を侵すなく、邪念の我が思慮を亂すなきに至れば、吾等は念々宇宙の大道を離れず。一舉一動天地の妙用と合致することが出来らるやうになるのである。何をか宇宙の大道といひ、天地の妙用といふか科學者は客觀的に之を説明して微に入り細を穿ち玄を盡くし幽を究め、吾等が日常の經驗に立脚して確予たる論證を宇宙人生の上に與へんとして居るのであ

宇宙の大道の  
 天地の妙用

唯物論  
 唯心論

るが、畢竟するにそれは吾等が實驗し觀察し得らるゝ範圍にのみ限られて、其以上は一步をも出ることには出来ないのである。科學の云ふ所は一部で總體ではない、哲學者は大膽にも宇宙萬象を大別して我と非我とし、我はこれ主觀、非我はこれ客觀、主觀はこれ心、客觀はこれ物この外に一物の存するなしとし、さて此二者の中に於て客觀を主とし、宇宙萬象は物質と物質との集合に過ぎず、其主觀的作用と稱する精神の如きも其實は腦神經なる物質的作用に外ならずといふ唯物論も、主觀を主として一切の物質は悉くこれ主觀の發現にして心の上に映るの影であるといふ唯心論とがあつて二者の争ひは希臘哲學の昔より今日に至るまで久しく絶えないので、一般に唯心的なる東洋哲學の中にも、唯心的傾向を有するものあつて東洋西洋の哲學史は實に此二者の盛衰消長の跡を

宇宙と人生

示して居るものであるといふてもよい。或る人が王陽明に對して先生の云はる如く天地山川は悉く我が心の所現なりとしたならば、我れ死するの後、天地山川はあるべき筈ではない。然るに我れ死するも尚ほ天地山川の依然として存するあり、これ如何なる理ぞと尋ねた時に、王陽明は平然として、其人死するの時は其人の天地山川存するなしと答へたといふのは有名な話で、これは實に唯心的の極端な議論である。併し唯物と云ひ唯心というて争うて居るのは未だ幼稚なので、此二つは決して別々なものではなく、其根本は一つのものに外ならぬので、スピノーザは此二つは同一圓形の内より見れば凹形となり外より見れば凸形となるが如く、主觀的には精神といひ客觀的に物質といふので決して別のものではなく、宇宙の本體は自存にして唯一自由にして永恒なる者である

るといひ、爾來近世哲學の此系統を辿りて駸々として進み其泰斗と云はれたるエマニエル、カントに至ては高眼達識其思想は精到幽遠、哲學研究に一生面を開き、其後の哲學亦玄妙の域に入り、フイヒテ、ヘーゲル、シヨツペンハワー等の議論は實に人文史上の精華と云ふべき者であるが、要するに宇宙の現象は物といひ心といひ、さまざまに分れて居るが、其本體は唯一の實在に外ならずとする現象即實在論で、其實在を唯心的に見て居るか唯物的に見て居るかといふこと、いづれも唯心的で、シエーリングは我即ち精神界は非我即ち物質界より咲き出でたる花の如きもので此花こそ自然界の眞性質を示す者であるといふヘーケルは絶對的理想を以て宇宙の實在とし、一切の事物は皆な此理想の發現なりといひ、シヨツペンハワーは意志を以て宇宙の根本とするなど、其議論は

各異彩はあるが、一概に唯心的傾向であるといふことは疑ひのない事實である。これは實にさうあるべきことで、吾等は如何に冷やかに見るも此宇宙を以て機械的無意義の活動であるとは見ることは出来ない。何等か意義あり、目的あるものと考へねば承知することが出来ないのである。それは科學者のやうに何物をも分析的に見たならば、無意義な機械的な物質的なものを見る事が出来るかも知れぬが、それは其一部分一部分を見るからで、全體を総合して見たならば、何人も其間に何等かの意義あり、目的あるといふことを認めねばならぬ。これ實に近世哲學が皆な唯心的傾向を帯びて居る所以で吾等は其意義の深く目的の大なるを思ふ毎に、宇宙は偉大なる實在即ち神の顯現なりといふことを拒むことは出来ない。而して其神其實在は決して現象界の外に存するものではない。

い。こゝに於て吾等の所謂汎神觀は成立するので、吾等は前にもいふ如く此宇宙の實在を以て神とし、萬物を以て神の顯現とするので、彼の一神論者の宇宙以外に神ありといふ如き非論理的のものではない。宇宙の無限なるは神の無限なるので、宇宙の絶對なるは神の絶對なるのである。宇宙の靈妙なるのは即ち神の靈妙なるので、宇宙の正善なるは即ち神の正善なるのである。

峰の色溪のひびきもみなよがら

我が釋迦牟尼の聲と姿と。

東坡の所謂溪聲 便是廣長舌 山色無非清淨身 佛敎で謂ふ所の眞如といふのもこの宇宙の妙趣を指したる眞實如常の法に外ならぬのである。されば

此法に順ずるを以て善とし、之れに違ふを以て惡とし、こゝに人道の根柢を置き、念々之れを離さず、舉止これに背かざるを以て宇宙の大道に順ふといふ。心性周遍し、虚徹靈通す、之れを散すれば即ち萬事に應じ、之れを收れば一念となる(華嚴經)

で、吾等の心裏には此の宇宙の妙趣を脈絡貫通する靈妙なるものがあるのでこれを發揮してゆくのが修養の道程で、此大道に違はざるやうにしてゆくのが人生の要路である。人は一個の小天地、我はこれ一個の小宇宙で、此小天地小宇宙が彼の大天地大宇宙と離るゝことなく其妙用を盡くして行けば、それで我等の務は充分である。不幸にして吾等は小を執して大を忘れ唯だ自己の欲求する所にのみ走せて其本務を失却するに至るのである。これ、世に教といふもの

我は一個の  
小宇宙

の存在する所以で、古聖これを示し先賢これを説かれたる道德倫理の要は茲にあるのである。併し吾等は議論を以つて人は斯くなすべきものなり、これ宇宙の大道なり、人生の要路なりと聽いたからとて、それで直に實行するものではない。否な實行しようとする心の起らぬではないが、我慾深く妄執固くして其事の行ひ難く、其道の遂げ難きを思つて失望落膽易きに就きて難きを避け、心ならずも大道に違却するの風があるのである。此時に當り身を以て之れを行ひ一言一行悉く吾等を啓發するの師表あらんか、吾等はこのを見て、彼れも人なり我も人、彼にして既に行ふ、我豈に行ふ能はざるの理あらんやといふ奮勵の心を抱き其師表によりて道を行ふことが出来るやうになるので、學者が千言萬語の議論よりも先賢の片言隻句に感ぜしめらるゝことの多いのは全く其人が

宇宙と人生

大道を體現して、自ら活きたる道徳の典型とならるゝからで、これは空論でなく實際にあるのであるから吾等は偉大の感化を受けざるを得ない。古來宗教の祖と云はるゝ人々は皆な此人格を以つて他を導かれたので、單なる道徳よりも宗教の人生に力あるのは、彼れには人格の感化なくしてこれには此の人格の感化があるからである。佛教徒が釋尊を以て佛陀の應身として宇宙の大道は此人によりて體現せられたりとし、基督教徒が耶穌基督を以て神の子なりと崇拜し此人によりて神の福音は傳へらるゝとするのも全く此人格の力で、此力なき道徳は感化の功頗る微弱なるものである。彼の紙を裁つに手慣れたものは準木なくとも正しく裁つことが出来るが尙ほ手の狂ふことがないとは云はれぬ。併し準木さへあれば誰にでも、正しく裁てるが如く自から宇宙の大道を看取し人生

の要路を認めたらば、正しく道を行ふことが出来るが、尙ほ誤りが無いとは云へぬ。併し聖賢を準木として之れに順うてゆけば何人も亦正しく其道を行ふことが出来るものである。吾等は自ら奮つて心裏の靈光を發揮して宇宙の大道に則り、更らに聖賢の言行を模範とし歩一歩これに近づかんことを計り、刻苦勉勵以て其修養に努めねばならぬ。

さて宇宙の大道は如何に現前し、聖賢は如何に教示するか。吾等は精到に宇宙を看取して萬物の一體にして、しかも無盡に相關し調和することを知り、差別の現象そのまゝに平等一如の本體にして、平等一如の本體がそのまゝに萬象の相を示すことを知つた。これこの理はやがて吾等が人生の要路を明し人の盡くすべき道を教ふるものではないか。萬象は差別あり、法は法位に住す。



こゝに於て人は各々個人として盡くすべきの本務あり、各々其盡くすべきを盡くして相和し相通じ渾然一體圓融して天地の妙用を現はす。古人の

同じくこれ天地、同じくこれ萬物、各々其所を得れば即ち治り、各々其所を失へば則ち亂る、聖人化育に參贊す、只物々をして各々其所を得しむるのみ

(詳念芝)

と云へるもの即ち是、然も唯各々其本務を盡くすといふも、其本體は即ち一であるから相和し相通じすることを忘れてはならぬ。各々其本務を盡して相和し相通する所はこれ差別そのまゝに平等、平等そのまゝに差別なる妙趣である。人生は孤立にあらずして社會は共同生活である。既に共同生活であるといふ趣を理解したならば、我の存在は常に我自身の爲のみにあらずして人類共同生活

の爲めであるといふことが解る。既に人類共同生活の爲めであると解したならば、我が任重大く我が責頗る大で、徒らに此世と隔離して獨り自ら潔うする如き遁世脱俗主義の生活は未だ以て道を全うするものといふことは出来ない。こゝも亦浮世なりけりよそながら

思ひしまゝの山里もがな

と山院に閑居して世塵と遠かり、自ら稱して道を守るといふ、道を守ることは或はかゝる遁世脱俗の生活で出来るかも知れないが、道を行ふことは出来るものではない。許由は遁世脱俗の人で堯が之れに天下を譲らんとした時に厭はしきことを聞けりとして耳を潁川の水で洗つたほどである。或る人此許由の畫の贊を水戸光圀に請うた時、光圀は筆を執つて、

耳を洗ふ心の水は清けれど

ながれは汲まじ世を救ふ身は

と書いたといふことである。耳を洗ふ心の水は實に清いものであるが社會の共同生活に向つて何の貢獻する所もない、道徳は死道徳で、活潑々地たる宇宙大道に順ふものといふことは出来ない。天地に生々の徳あり世に離れ社會と絶つのは自己の修養のみを思ふて利他の行爲を忘れたものでまことの道ではない、よし又自己の修養の上からいうても、世に離れ社會と絶つ遁世脱俗が何程の功があるであらう。それ世と離れ社會と絶つて漸く自己の心神を清淨ならしむることが出来るので、少しでも世塵に觸れると直に折角の修養も其功なきに至るほどのものは修養其功を積んだものとは云へない。坐禪せば四條五條の橋の上

往き來の深山木に見て

往き來の人のまにまに見

靜中の靜は眞の靜に非ず

往き來の人を深山木に見て」で、衣香扇影、人を魅する四條五條の橋の上寂寥として心を動かすなきに至てこそ修養も其極に達することが出来る。併し此の往來の人を深山木に見なければならぬ間は、まだ充分ではない、其極に達すれば「坐禪せば四條五條の橋の上、往き來の人をそのまゝに見て」といふ境にまで入らねばならぬので、決して山院靜かに坐禪しなければ心が動くといふやうでは、自己の修養の上からいうても完全なものではないのであるから遁世脱俗主義では道を行ふことが出来ないのみならず、道を守るといふことも怪しいものである。

靜中の靜は眞の靜にあらず、動處に靜し得來て纔にこれ性天の眞境樂處の樂は眞の樂にあらず、苦中樂み得來て纔に心體の眞機を見る(菜根譚)



上求菩提  
衆生下化

現世輕賤  
主義

で、道を守るものは動靜の二境にあつて心を左右せられてはならぬのである。況んや道を行ふに於ては世塵に曝され俗輩を伍して其心を味まされず却て之れを清め之を導くのが概がなければならぬ。佛教に所謂上求菩提下化衆生といふのは此事で上、菩提を求むることを忘れざると共に又下、衆生を化してゆくのを菩薩の行とし、人生の要路を示すのである。既に空間的に遁世脫俗主義を非とする上は又時間的に現世輕賤主義にも反對せねばならぬ、現世輕賤主義といふのは、現世の社會を厭うて來世の生活を主とするので或る宗教の如きは盛んに此主義を鼓吹して、現在に鬼も角もあれ、死後をさへよくすればよいといふとのみを説き、此世を以て夢幻の如しと見る、これ實に宇宙の大道に違却するもので、未來といひ現在といふも共に無限の時間の一部で因果は不斷に相續し

現在と未來との  
間の輕重の  
差なし

て居るのであるから現在の輕んずべきなく、未來の重んずべきはない、現在輕んずべくんば未來も輕んずべく、未來重んずべくんば現在も重んずべきで其間に輕重の差を設くべき理由はない。現在も宇宙の一現象に過ぎねば未來も亦一現象に過ぎぬ。それに事實なる現在を輕んじて空想たる未來を重んずるといふことは其當を得たことではない。成る程現在の社會は缺陷が多い、併しこれを改めてゆくのが吾等の任務ではないか、吾等の祖先は幾多の歲月の間に諸種の苦心を経て現在の社會を形成したのであるから、此社會を今一層完全にして吾等子孫に譲り渡すのは人生の本務である。それを忘れて未來の生活のみを憧憬し、現在を塵末にするのは吾等の斷じて賛することの出來ない主義である。勿論來世を要求し、永久の生命を望むといふことは人類自然の性情から出たの

で、何れの宗教もこれを説くので決して悪いことではなく、吾等も亦來世を要求し、永久の生命を望むのではあるが、それは現在の生活に偉大の力を與ふるからで、その爲めに現在を輕んずる如きは眞正なる道ではない。吾等は遁世脫俗の主義に反して和光同塵の生活を主張するが如く現在輕賤主義に反して現在尊重主義を唱へねばならぬ。既に現在を尊重し厭世脫俗を非とす勢ひ彼の自殺の如き行動を排斥せざるを得ざるは云ふまでもないことである。曾て山田某なる一青年が阿蘇の噴火口に投じて自殺した時に其遺書を評論して左の如く説いたことがある。

○噴火山頭に死を遂けたる山田某の遺書の劈頭にいふ

世人自殺を以て意志薄弱なると、何ぞ誤謬なるぞ、彼等は如何なる境遇に

現在尊重主義

惜しい哉病的なり

在りても、尙ほ其生を保たんご欲す、此間に處して彼等が耳にするだに戰慄すべき死に就かんとするは、是れ最も強固たる意志の存在に因らずんば非ず、世には如何なる境遇に在りても尙ほ死を遂行し得ざる懦夫の如何に數多きかを絶叫せざるを得ざるなり。

と、此覺悟を以て阿蘇山頭、焰々として燃ゆる噴火口に投ず、壯は壯なりといへども、惜哉、これ病的なり。

○一面より見る自殺は薄志弱行の徒の爲し得べきことにあらず、然れども貧苦に迫る老嫗尙ほ之れをよくし、戀に泣く少女尙ほ之れを敢てす、直に以て強固なる意志の存在と爲すべからず、自殺の可否善惡予大に論あり請ふ少しく言はしめよ。



の見込あらば、いつにても生くべし」さいへるもの即ち是。

○山田氏の噴火口に投ぜる、果して、之れ社會の共同生活を助けたるか、其進歩發達に貢献する所ありたるか、其跡哲人エムベドクリスが名の爲めに噴火口に投ぜるの甚しきに類せずとも、身後の名の爲めに計るの譏を免るゝを得るか。

○身後の名の爲めの譏を免れ得るとするも、其利己主義に出でたりとの批評は辭するを得じ。

○死は人生を悲觀し惡觀し「社會は是れ唯憂愁煩悶の修羅場にして人生は窮苦懷疑の餓鬼たるを見るのみ」といひ「無限の愁思を抱きて汚らはしき罪の巷に彷徨んよりムシロ清き自然の懷に抱かれて永遠に塵世を脱出するの如何

に人生最後の幸福なるかよ、斯かる觀念を懷き、阿蘇山頂噴火口の烟と化す(原文の儘)とこれ死を以て自己の幸福なりと思惟して投身したるなり、壯は壯なるに類すと雖も、自己の幸福を想うて親戚故舊の哀悼を顧みざりしなり。○哀悼は唯だ汝の心に任ず、予は予の幸福を得むのみといふ、これ利己主義の甚しきものにあらずや、他人の迷惑を顧みずして自己の慰安をこれ計る、不都合これに過ぎたるものあらむや。

○いづれの點よりいふも、自己の慰安の爲に死するは利己主義なり、社會の共同生活を無視し、其進歩發達を阻害するの惡事たり。

○死は人の厭ふ所なりといへども、之れを行ふ難きにあらず、生は人の喜ぶ所なりといへども、其生存の意義を保つや難し、此難を棄て、彼の易きに就

く、これを薄志弱行といはずして將た何とか云はむ。

これ實に吾等の主義より來るべき當然の結論で、殆んどこゝに繰返すの必要はないほどである。こゝにもいふ如く人類の本務は社會の共同生活を助け其進歩發達を計るのにあるから、其爲めには生命を賭して少しも顧みる所のない勇氣がなければならぬが、無益に棄すべき權のあるものではない。戰場に臨んでは驀直進前毫も死を恐れざりし本田作左衛門が病床にあつて「死にともなあら死にともなく御恩を受けし君を思へば」といひしは此人生の本務を明にしたものではないか、楠正成が「身の爲めに君を思へば二た心、君の爲めには身をも思はじ」といへるは誠忠無二の精神を披瀝して宇宙の大道人生の要路を指示せるものではないか、これが即ち武士道の精髓である、人生は戰場なり、吾

等も亦此武士道の精髓によつて世に處さねばならぬ、吾等に此覺悟あつて初めて念念道と離れず、一舉一動大道と合致することが出来るのである。道といふたからとて別段特殊のものが存在して居るのではない、趙州和尚が其師南泉禪師に向つて「如何なるか是れ道」と問はれた時、禪師は直に「平常心是道」と喝破せられた、平常心がそのまゝに宇宙の至理、天地の公道の發現に外ならぬ若し夫れ我が心此の至理公道と一致し喫茶喫飯もこれと離るゝことがなかつたならば吾等の一舉一動は即ち是れ宇宙の一舉一動、吾等の生死去來は即ち之れ宇宙の生死去來で、吾等と宇宙とは何の隔絶する所なく、宇宙の普遍なるが如くに吾等も普遍に、大道の無限絶對なるが如くに吾等も亦無限絶對である。宏智禪師はいふ

十方大地是我一箇身

十方衆生是我一箇漢

と、道元禪師はいふ

盡十方界一人として自己ならざるはなし。しかあれば則ち箇々の作家箇々の拳頭、ひとりの十方としても自己にあらざるなし、自己なるが故に自々己々みなこれ十方なり、自々己々の十方、たしくし十方を至礙するなり。

こいはれてある、我が心にして大道と一致する時は、此の自己は小なる自己にあらずして、大なる自己である。即ち天地と大を等しうし宇宙と其廣を同うるの自己である。これは修養其功を積んで到るべき境で、心を此境に住すれば日常生活がそのまゝに道を行ふことなるので、道を行ふといふも特殊な事を行ふのではない、商業家が牙籌を手にしつゝ、農業家は來鋤を用ひつゝ、官

大道は現至  
しはしは  
露現す

吏は刀筆を使ひつゝ乃至軍人は劍を提け馬に鞭ちつゝ社會の共同生活を助け其進歩發達を計る中に大道は現前し、道を行ふの功は成るのである。道は空理にあらず又空論にあらず。目前に示されたる事實なり、大道は現前し至理は露現す、これ眞如の妙用、神の顯示で、宇宙の妙趣これを明にし、天地の至理これを詳にし居る人生の要路で、古聖賢の身を以て其範を垂れられた所である。されば吾等は唯だこれを信じこれを行へばよいので徒らに理を説き義な究むることを知つて、實際に此れを行ふことなくんば未だ以て道を得たものとはいへぬ。大慈寰中禪師が  
一丈を説得するは一尺を行取するに如かず、一尺を説得するは一寸を行取するに如かず。

宇宙と人生

こ、云はれ、周濂溪が

聖人の道、耳に入て心に存し、之れを蘊めば徳行と爲り、之れを行へば事業となる、彼の文辭のみを以てする者は陋なり。

と、云うたのも、こゝの道理である。以上説き來りたる所を一括すれば吾等の宗教は明白である。吾等は遁世脱俗を宗とする者にあらず、又現在輕賤主義に左袒するものにあらず。空理空論を喜ぶものにあらず、吾等は宇宙の妙趣を感じ得し天地の公道を看取して、之れに無限の力あるを信じたる汎神論の歸結として吾等は社會的、現代的、實行的なる宗教を主張するものである。吾等はこゝに慰安と活力を得、實際生活の中に無限の趣味を感じるのである。

### 五 生活の趣味

生活の苦痛……道義的生活と宗教的生活……趣味ある生活……壯美と優美……宇宙活動の二面……奮闘的生活……人としての成功……自信……同情的生活……禽獸に對する同情……愛……慈悲……富樓那……拱辰……簡易なる生活……有用と無用

既に宇宙の大道を感得し人生の要路を看取す、吾等が生活の本義は明かになつたのである。吾等は生きむが爲めに働くにあらずして働くべき爲めに生くるのである。其働くは生存の爲めにあらずして道の爲めでなければならぬのである。かく考へて來ると我等は此生活を以つて一種の苦痛なりとは考へないであらうか。誰れも働きたいといふものはない、遊んで居りたいといふのが人の常

道の爲

生活の苦痛

情である。それに對つて働かねばならぬこゝの強ひて厭ふべきことをなさしむるので何の面白味もないこととなる。人生はしかく無趣味なものであらうか、人生を斯く無趣味なものとするれば、生活は一つの苦痛である。吾等は此苦痛を忍んで生活せねばならぬのであらうか。道の爲めに盡くすといふ名は立派であるが、我が身に取つては苦痛ではなからうか、朝起きといふことは善いことであるが、眠い目をこすりながら起きねばならぬといふことは苦痛ではないか、自身が思ふまゝに放恣なる生活をしてこそ楽しくもあれ、道を行はねばならぬといひ、道に背いてはならぬといふのは埒に繋がれたる悍馬の如く全く自由を束縛せられて居るので、毫も樂しきことはない、古人が人世を苦の海といひ涙の谷というたのも無理もなきことと思はれる。併しこれは未だ修養其功を

苦の海  
涙の谷

苦の苦  
たるを  
感ぜぬ  
やるに

積まぬからで、修養其功を積んで我と一になつたならば思ふがまゝに道に順することになるので、朝起きは辛いことであるが、一日より二日、一月より二月一年より二年、三年四年と早起きの習慣を造れば自然に起きらるゝといふ所まで達し、此所に達せば早起きをせねば不快を感ずるといふやうになる。かくなれば知らず識らず道に順することが出来るので何の苦痛もないではないか。これは先きに修養の道程に於て説明した所であるが、かくいへば又其修養功を積むといふことが苦痛であるといふ人があらう。然り強ひて狂ひ易き心を止め散じ易き妄念を押へて精神を修養するこゝも苦痛といへば苦痛でないこととはない。されどそれは其當初のみの苦痛で、これを繼續して行けば慣ひ性となつて、苦の苦たるを感ぜぬやうになる。繼續して行けば苦の苦たるを感ぜぬや



道義的  
生活と  
宗教的  
生活の  
差異

うにならうが、其當初は既に苦痛でそれを繼續するのも亦苦痛ではないかといふ人があるであらう。論歩もこゝまで進んで來れば直に根本義を明にすることが出来る。元來苦といひ樂といふのは其人の心の持ちやうで、爲さなければならぬ義務であると感じればこそ苦痛であるが、喜ばしや今日も亦かく爲すことが出来ると思へば快樂である。朝早く起きて今日も働かねばならぬと思ふからつらいのであるが、今日は一日遊び暮らすことが出来ると思へば自然に朝早く起きらるゝではないか。道を行ふことを義務と思ふから苦なので權利と思へば樂である。これが道義的生活と宗教的生活との異なる所で、道義的生活は義務であると思つて道を行ふのであるが、宗教的生活は權利であると思つて行ふのである。權利といふのは少しく穩當な辭でないが、先づ一應はかう見るこゝが出来

義務的  
生活と  
感謝の  
生活

る、更らに適當なる語を以ていへば道義的生活は義務的生活であるが宗教的生活は感謝的生活である。生を此天地に受け自ら其化育を助くるの業を勵むことを得る、於戲これ何の幸ぞやと感じてゆくので、厭や／＼ながら行ふのでなく樂しんで行ふのである。樂しんで行ふこゝいふ中に、生活の趣味は存するのである。

趣味あ  
る生活

趣味とは美を享受するの性能で、吾等は宇宙の妙趣、天地の美觀を感得する時にいひ知れざる心に面白味を生ずるので此面白味此樂みを常に忘るゝことなく世を渡ることが出来ればそれは即ち趣味ある生活である。如何にして此生活の趣味を感すべきかといへば、

春有ニ百花一秋有レ月

夏有ニ涼風一冬有レ雪

生活の趣味

若無閑事掛ニ心頭 便是人間好時節 (無門)

で、我が心を淨くして宇宙人生を味へば、そこに快趣を生ずるので、此快趣を感得するここの出来ないのは其心に何事かの宿すあつて、脱白露現、赤裸々たる宇宙の美觀、人生の妙味を知ることが出来ないのである。古人が

法の道守らばいかに安からん

心からなる今日の苦しさ (讀人しらす)

看よ、宇宙の妙趣を、其美は眩きばかりに吾等が前に現はるゝにあらずや。美に二あり。一を壯美といひ、他を優美といふ。壯美は力の發現なり。

巖をもくだけ落ちなん心地して

空にとどろく山の瀧つせ (八田知紀)

壯美と優美

宇宙の壯嚴に打れて崇高の念禁すべからざるものあるはこれで、優美は微小のものにも現れたる天地の妙趣を感じ、其間に於ける調和、統一、均整を感ずるので、

道細しすまふとり草の花の露 (芭蕉)

艸いろくおのく花の手柄かな (同上)

しみづにもうつりて涼し辻が花 (辨吟)

藻の花や水ゆるやかに手長蝦 (子規)

の如きは優美に屬するのである。予は今こゝに美を論ぜんとするのではないが暫く美に就て云へば吾等が心に敬虔の情を生ずるは此壯美を感ずるが故で、吾等が心に慰安を得るのは此優美を味ふが故ではあるまいか、壯美はいつれかと

いへば動的にして優美はいづれかといへば靜的なり。吾等は宇宙の活動を見ても尙ほ此二種の傾向あることを看取することが出来る、即ち一は生存競争の理法が不斷に行はれて優勝劣敗の規律嚴然たるものがあることで、他は相互救済諧和均整の法の其間に存することである。太陽の求心力と地球の遠心力とが諧和均整して吾等が世界は天空に懸るを得、動物と植物とは相互に其生氣を交換して繁茂し増殖するではないか。之を人生に見る、一面に於て生存競争のことは行はるゝと共に他面には共同生活の實を擧ぐるではないか。唯だ此生存競争の一面を見て、人生を苦觀するものは未だ他の一面を看取するの明なきものである。さればとて共同生活の美のみ見て生存競争の峻烈に行はるゝを知らざるものは終に自ら生存の權利を放棄せねばならぬやうになるのである。社會は

此生存競争によつて初めて進歩し、此共同生活の美によつて初めて圓滿なるので、其一を缺くの時は或は其進歩を中斷し、或は其組織を破壊するに至る。人生の本務を以て既にいひたる如く、社會の共同生活を助け其進歩發達を計るにありとせば、吾等は一面此生存競争に對しては飽くまで奮闘的生活を試みねばならず、努力主義を以つて行かねばならぬのである。「憂きことの尙ほ此上に積れかし限りある身の力試さん」ミ千難我が前に横るとも萬苦我が進路を妨ぐるとも、刻苦勲勵、行くべきに向つて行き進むべきに向つて行き進む。これ實に人の美ではないか、宗教改革の健兒ルーテルがウオルムスに喚ばるゝの時人は皆な其危険を思つて止るべきを勧めたが、ルーテルは斷々乎として「よしウオルムスの屋瓦が悉く惡魔となつて我を害するとも我は必ず行かん」とい

龍ノ口  
に於け  
る日蓮  
上人

修 道 講 話

ひ、日蓮上人が龍ノ口に於て白刃の下に坐して「醜き頭を以て尊き法華經に代ふることを得るは幸なり」といひて泰然自若なりしを聽いて我が心躍るが如きの感あるは此奮闘的生活の美が吾等を啓發するのではないか。吾等が道を行ふには此奮闘的態度を持って不斷の努力を怠つてはならぬ。世の中の仕事に成功不成功なぞといふのは、諸種の事情や境遇によるので、成否は決して其の人の價値に關するものでない。唯だ自分の本分を盡くして鞠躬努力、斃れて而して後に已むの心あらば、其人の事業は無効に歸すべきものではない。よし其事業が無効に歸するとも其人は人として既に成功したのである。人としての成功これ吾等の理想とすべきことで、目前の名譽や利祿を以て成否を談ずるのは未だ眞に成功の意義を知つたものとはいへぬ。ソクラテースの一生は成功ではなかつ

人とし  
ての成  
功

事業に  
ての成  
功

た、彼れは終に毒杯を手にはせざるを得なかつたのである。基督の一生も亦成功ではなかつた。彼れは事業半ばにして十字架上の鬼とならざるを得なかつたのである。楠正成の一生も亦成功ではなかつた。彼れは湊川草頭の露と消えねばならなかつたのである。併しながら彼等は實に人として成功した。人として成功したるが故に彼等は今に至るまで敬慕追想せらるゝのである。今の世の成功者を以て目せらるゝものは多くは事業に於ての成功で人として失敗である。事業の成功も本より望むべきであるが、それが爲めに人としての失敗を醸しては何の功もないのである。吾等は人としての成功を思つて奮闘し努力すべきで事業の成敗利鈍を眼中に置いてはならぬ。一意自ら信ずる所に向ひ他の毀譽に動かされず、褒貶に味まされず、爲すべきを爲し、行ふべきを行ふ、笑はゞ汝の

生活の趣味

自信は  
力なり  
我を知  
るは我

笑ふに任す、誹らば汝の誹るに任す、我は我が信ずる道を行ふといふ意氣さへあれば、此奮闘的生活の中にも常に快感の之れに伴ふものである。さて此奮闘的生活に此快感を伴はしめんとするには、確乎たる自信がなければならぬ。少しでも此自信が撓むやうなことがあれば直に其快感を滅殺せしめて努力の苦痛を感じるのである。自信は力なり、西郷南洲の「人を相手させずして天を相手とす」といへるは、此自信の淵源を宇宙の大靈天地の妙趣より得來りたるが故にあらずや、我が心を知るものは他人にあらずして我自身なり。我自身としては尙ほ不安の念を去る能はずとするも、天あり、神あり、佛あり、吾等以上の實在、我等の懐かれたる大靈は頭上足下吾等を誤ることはないのである。吾等に此信仰あり以て自信を強烈ならしむ。強烈なる信仰は奮闘の利器、努力の良

鞭である。

以上は生存競争の一面に就て語つたのであるが、唯此生存競争のみを見て共同生活の一面を忘るゝと、其の奮闘も自利主義に流れて無趣味の甚しきものとなるので、生存競争の機關は信仰の火によつて動かされ共同生活の油によつて圓滑に廻轉するのであるから共同生活の美を成すの點に於て吾等はこゝに同情の必要を認めねばならぬ。同情これ實に一切道德の淵源ともなるべきもので、孔子の我が道は一以て之れを貫くというた、一とは忠恕即ち此同情のことで、基督の愛と説き、釋尊の慈悲と云はれたのも亦これである。同情は自己を没して他を思ふことで、俗言に所謂「おもひやり」に外ならぬ。おもひやり即ち同情といふのは自他平等天地一體萬物同根の道理から出たので、此心さ

同情

生活の趣味

へ深かつたならば世の中に紛争といふものは起るべきでない。世の中に紛争の起る根柢は、各我見を執するからで、此我見を打破し見よ、堅氷を溶かして水となすが如く、能く方圓の器に従ふことが出来るのである。能く方圓の器に従ふ、こゝに於て人と相和して些の不安あることなし。家庭道德の要義は、實に此同情の二字に盡き、人類共 同生活の美も亦此同情によつて完成せらるゝのである。同情なき生活は秋風落寞たる如き寂しき生活にして同情ある生活は春風駘蕩たる如き趣味ある生活である。吾等が若し此同情を以て如何なる人の行動に對しても之れに下すに善意の解釋を以てしたらんには徳孤ならず終に他を感ぜしむるに至るので、丁度水の必らず平均を保つが如く人の心も亦他の心と平均することの出来るものである。されば菩薩の四攝法として佛敎に示す所は

四攝法

一切の行動を慈善的ならしむる布施、其言語は赤子に對するが如き愛語、他を利する利行、他と其事を同する同事を以てす。蓋し此四は悉くこれ同情の發展で、此心を一切に及ぼし禽獸虫魚に對しても忘るゝことなくんば吾等の心は佛に近づき神に伍するに於て恥るところはないのである。伴蒿溪曾て逢坂山に於て情けなくも進みかぬる牛車を追ふを見て、

小車のめぐりこん世はおのれまた

ひかれてうしと思ひしるらし

三、咏じ、鬼貫が

行水のすてどころなし蟲の聲

といへるも亦此同情に外ならぬ。「小蟲を踏みにじりて毫も意に介せざるが如き

生活の趣味

無情の人は友とすべからず」と或る人のいうたのは、確かに人物鑑定の標準である。此同情といふことは單に道德上の意義に於てのみ必要なのではなく、趣味の上にも亦頗る重大の關係を有するもので、去來が、

俳諧は物を憐むことを要領とす。物を憐むとは草木の霜にあひ鳥類の寒暑に苦むなり。されば常に臥したる乞食に向ひてきたなしと思ふ念起らば一句に結ぶこと難し。不便と思ふ心は則風雅の一句なり。

といへるは此趣味を道破せるものではないか。生活の趣味は此同情によりて初めて深いのである。彼の奮闘的生活に於ても此同情あつて爲我主義たるを免るゝので、同情なき奮闘は生活の趣味を打破するものである。神は愛なり、佛心者大慈悲心なり。吾等は此心を心として奮闘せねばならぬのである。生活す

神は愛なり

るとは外の義ではない、道を行ふことで、道を行ふに此の奮闘あり此同情あつてこゝに生活の美を感じるので、雜阿含經に

爾の時、富樓那、佛に白す。われ已に世尊の教を蒙りぬ。今や西方輸盧那に遊化せんとすと。佛告けたまはく、西方輸盧那の人、凶惡輕躁にして罵詈毀辱を好む、汝若しその毀辱を聞かば云何がするこ。白す、世尊よ彼の國の人われを毀辱すとも、我は此念を作さん、彼の西方輸盧那の人、賢善にして智慧なり、われを毀辱せるも尙ほ石を以て打擲するに至らず。佛又告けたまふ、彼の國人の毀辱は、よし汝に於て忍ぶとも、若し又石を以て打擲せば云何。白す、われは念じて言はん、輸盧那の人、賢善にして智慧あり、石をわれに加ふるもなほ刀杖を用ひず、佛更に告けたまふ。若し刀杖を汝に加へ

生活の趣味

汝よく忍辱を學べり

なば云何。白す、われは念ぜん輪盧那の人賢善にして智慧あり刀杖をわれに加ふるも尙ほ我を殺すに至らずと。告げたまふ、汝を殺さば云何。白す、われ此の念を作さん、死の縁一ならず、或は繩を以て自ら繋るあり、或は深坑に投ずるあり、彼の輪盧那の人賢善にして智慧あり、わがこの朽敗の身に於て少しの方便を以て、即ち解脱を得せしむ。佛のたまはく、善哉、富樓那よ汝よく忍辱を學べり、汝今能く輪盧那の中に止住するに堪ふ、行け富樓那よ彼に至りて未度のものを度し、未安のものを安んじ、涅槃を得ざるものに涅槃を得せしめよ。

其心、優にして、志壯ではないか、吾等が世に處して道を行ふ、須く此富樓那尊者の心なかるべからずで、要は小き我を棄て、大なる我を旨とし、私の心

拱辰禪師

豈に名爲利に著さんや著さんふ高風慕べし

を棄て、公の心に住する無我の生活である。これに就て少しく極端に類するかも知れぬが趣味ある逸話がある。それは彼の景德傳燈録のここで、此書は禪宗の歴史として有益なので湖州鐵觀音院の拱辰禪師の著はされたのであるが、禪師が之れを携へて京師に上り帝に奉らんとて舟に乗られ、舟中に一僧に遇うて其稿を示された。スルト其僧は稿を盗んで去り宋の眞宗の景德元年に之れを流布した。僧名は道原、人皆な此僧の著として名聲噴々であつたが拱辰は之れを聞いて少しも怒らず、我が意は佛祖の道を明にするにあり。其名の如き彼我いつれにあるも亦同じ、豈に名利の爲めに著はしたるものならんやと云はれたといふことである、其高風實に慕ふべきではないか、天空海潤、吾等の心此の如きに至つたならば人生何の苦悶もないのである。吾等は吾等自身の爲めに生



活すると思ふが故に名利に驅られ毀譽に迷ふので、公の爲めに生活するのである。道の爲めに生くるのである。社會の共同生活の爲めに働くのであると思へば小我小執は滅し去つて、エマルソンの所謂其理想を高尙にし其生活を簡易にしてゆくことが出来る、蓋し簡易なる生活は煩鎖なる葛藤を避けて一意理想に向上せしむる所以で、我等の向上を妨ぐるものは實に此煩鎖なる生活である人生僅か五十年、無常迅速にして生死事大なり。此短日月の間に於て吾等の日常爲せることは有用のこと多きか無用のこと多きかを考慮一番し見よ、有用に費さるべき時は少くして無用に費さるゝこと多きにあらずや。吾等は何故にかくも多くの時間を無用に費し、さなきだに限ある精力を無用に徒費するぞ。多くはこれ道ならぬ慾望の爲めか若くは名利の爲めではなからうか。道ならぬ

如何に生活するに簡易なるべきか

一生の使ひ方

慾望の爲めに道を行ふの時間と精力を抛ち、名利の爲めに簡易の生活を煩鎖ならしめ、自ら爲すべきことをも他人の手を借り、小事に屈托して大事を逸するの愚を學んで居るのである。生活を趣味あらしめんとせば、簡易ならしめねばならぬ。簡易ならしめてこそ理想を向上せしむることが出来るのである。如何にして生活を簡易ならしむべきか。他なし仕事の本末輕重を察し、事を處するに規律を重んずるにある。即ち能く人生の本務を會得し宇宙の秩序整然たるを思つて、我が行動をして之れを誤らざらしむるに注意し、必らず爲すべきことを先にし、必ずしも爲すを要せざることを後にし、爲し能ふの範圍を爲し能はざる部分ミを考へて、無益の憂慮と勞力ミを避くるのにある。簡易生活の著者ワグネルが、世にありて第一の仕事は先づ一生の使ひ方を知るにあるを悟れる

人々のみ簡易生活を味ふことが出来るというた如く、此無常迅速生死事大なる人生に於て、自己の行ふべき大道を明にしてこそ、奮闘も出来、同情も出来、規律も生じ、他の毀譽に動かされず、褒貶に惑はされず、我は我が信ずる所を行ふといふ意氣も出来るのである。此意氣を以て生活して、こゝに人生に意義あり、生活に興味あることが出来る。苦樂畢竟心にあり。修養其宜しきを得ば世路の難も、浮世の苦も、吾に於て何かあらむ。

勝日尋芳泗水濱、

無邊光景一時新、

等閑識得東風面、

萬紫千紅總是春。

(朱文公)

迷へる哉、吾等。心によつて心を苦め、此趣味を感得する能はず。却て笑ふ從前顛倒見、枝々葉々外頭に尋ぬるの痴を學んだのである。生活は刻下の事實な

汝自身を知るを得

り、トルストイはいふ、能く此大問題を考慮しなば他の凡ての問題は自ら解決せらるべしと。吾等は此問題の解決によつて初めて古聖の所謂汝自身を知るこ

中篇

一 道とは何ぞや

孝子の道……基督教の道……至道無難……宇宙の意義……菩提……佛道  
 ……聖人の道……教権主義を排す……自由討究……寛容の態度……天道  
 人道……至誠、博愛、正義……道は人に依らず……武士道……商業道……  
 ……藝術道

○吾等はしばしば道なる語を耳にし、其道の行ふべきを知り、修めざるべからざるを勧められたり。抑も此道とは如何なるものであらう。老聃はいふ、物有り混成す。天地に先ちて生じ、寂たり寥たり。獨立して改めず、周行して殆からず。吾、其名を知らず、之れに字して道と曰ひ、強て之が爲めに名け

道とは何ぞや

道とは如何なるものぞ

て大と云ふ。云々

と、又いふ。

道の物たる唯恍唯惚、惚たり恍たり其中、象あり。恍たり惚たり其中、物あり。窈たり冥たり其中、精あり。其精甚だ眞、古より今に及ぶ。云々

と、彼れは直に宇宙の本體、自然の妙用を以て道と名けたので、或る人は基督

教徒の所謂ロゴスをも此道と同じ意味に解釋した。基督教徒のロゴスといふは

約翰傳の劈頭に

太初に道あり、道は神と偕にあり、道は即ち神なり。この道は太初に神と偕

にありき。萬物は之れによりて造らる。造られたるものは一として之れに由

らで造られしはなし。

ロゴス

至道無難

こある道を指したので、其謂ふ所の意味に就ては多少深淺の異なる所はあるであらうが、宇宙の本體、自然の妙用を指すこいふ點に於ては大差はなからうと思ふ、僧瓌いふ、

至道無難、

唯嫌揀擇、

但莫ニ憎愛、

洞然明白、

毫釐有レ差、

天地懸隔、

と、宇宙の大道は洞然明白に吾等が前に現はれて居るのである。

○大道私なし、山嶽の大も微塵の小も、日月の高きも、溪谷の低きも、峰に生

ふる松も、野に咲く花も、此大道の現れにあらざるはない。吾等は之れを神の

默示なり、佛の顯現なりと見て、理に於ては理象即實在論を執りて眞如即萬法

萬法即眞如の説を信じ、情に於ては汎神觀によりて萬有即神と立つるので、其

萬有即神

道とは何ぞや

事はしばしば繰返したからこゝには略するが、吾等は如何にするとも此宇宙の活動を以て無意義なるものと思惟する能はず。露伴が「天うつ浪」に

山河、下に布ける此の天地の大にして大なるをおもひ、萬年萬々年の前に萬年萬々年あり、萬年萬々年の後に萬年萬々年ある此の歲月の久しくして久しきを思ひ、さて此天地の立てる所以をおもひ、歲月の經る所以を思ひて、此の天地と歲月との存在を、たゞく無意義なる事實のみと認めなば、誰かは味氣無き感に撲たれて悲み傷まざらん、されど此天地と歲月との存在の眞に無意義の事實のみならず、其中に意義ありなりと認むる時は誰かは乳房を探り得たる嬰兒の如く無限の喜悅に胸を躍らざらん。意義あり、意義あり、無意義ならず、神の御心即ち意義なり、佛の御心即ち意義なり、化醇の大法

神の子  
佛の子

はこゝにあるなり、歸善の定數こゝにあるなり。大慈の光明は柔かに山村水郷を包めるなり。大悲の音楽は斷ゆる間もなく古往今來に亘れるなり、我は此の溫暖き意義の中より生れたる子なり、神の子なり、佛の子なり、正眞の子なり、我と神佛とは血の相通へるなりと如是思ふ時おのづと悦ばしからば云々

といへるはこれ吾等の怡悦で、吾等は斯く感ずるが故に、宇宙の大道を以て神の默か、佛の顯現とし、吾等も亦此神此佛と同一の性を有することを信ずるのである。

○されば吾等は子思の「性に率ふ之れを道と謂ふ、道を修むる之れを教といふ」といへる性を以て宇宙の大道と脉絡貫通するものと解釋するので、宇宙の大

道とは何ぞや

佛應身の

道は脱白露現であるが、之れに率ふ所に人の道は存すると思ふのである。佛致で道こいへるは、梵語の菩提を譯したので、委しくいへば阿耨多羅三藐三菩提となるが漢譯すれば無上正等覺とも無上正徧智ともいふので性體周徧、妙用無礙なる宇宙の靈光で、この靈光を感得し、宇宙の大道と合致したのを應身の佛と名け、この佛即ち釋迦の顯示したる所を信奉して、以て無上菩提の大道を得るここが出来るとするので、宇宙の大道も此教祖の顯示を得て、吾等に獲得せらるこいふのが佛教の所立である。

○これ獨り佛教のみならず。基督教の基督顯示により、儒教の古聖先賢の道を尊ぶのも其趣は一である。子思いふ。

大なる哉、聖人の道、洋々乎として萬物を發育し、峻、天を極む、優々大なる哉、

る哉、禮儀三百、威儀三千、其人を待て而して後行はる。

と、宇宙の大道も實に古聖の人格的感化によりて初めて力あるのである。

○然れども道は道なり。聖人出でさるも大道は儼然として存し、眞理は眞理なり、教祖之れを示さざるも洞然として現る。吾等は釋迦これを説きしが故に尊ぶに

ぶにあらず、若くは孔子、若くは基督、之れを示せしが故に崇むるにあらず。

道なるが故に尊び眞理なるが故に崇むるので、これ諸他の宗教徒が徒らに教權の主義により、釋迦説きしが故に眞理なり、基督いひしが故に大道なりといふ

如き癡態を學ばずして、眞理なるが故に釋迦これを説き、大道なるが故に基督之れをいへりとするので、大道の前に釋迦なく眞理の前に基督なし、吾等は釋迦の人格を崇拜し、基督の爲人に敬服す、されど釋迦の所説なるが故に信ぜざ

道とは何ぞや

道なるが故に尊ぶの

るべからず、基督キリストの所説しよせつなるが故ゆゑに背そむくべからずといふ如ごとき窮屈きうくつなる宗教しうけうとは其旨そのしめを異ことにするのである。

○況いはんや派はを立て宗しうを分わかち、自宗じしう以外いげわいに眞理しんりなし、自派じは以外いげわいに大道だうだうなしといふものゝ如ごときは宇宙うちうの眞理しんりを私わたくしし、天地てんちの大道だうだうを壟斷ろうだんせんとするもので、修道しうだうの路上ろじやうに横よこはるの毒蛇どくじやなり荆楚けいそなり、吾等われらは一切いっさいの教權けうけんを排斥はいせきして自由じゆう討究たうきゆうの主義しゆぎを執とる。これ偏へいなく私わたくしなき大道だうだうを究きめむとするものゝ必然ひつぜんに執とるべきの主義しゆぎで、此毒蛇このどくじやを去きり荆楚けいそを除のぞく唯一ゆゑ方法はうほうである。

○教權けうけん主義しゆぎほど人文じんぶんの發展はつてんを害がいするものはない。中世ちゆうせいの歐羅巴ヨーロッパは羅馬教會ろまけうかいの教權けんしゆぎによりて學術がくじゆつの進歩しんぽを杜絶とぜつせられ、たまたまく新發見しんはつけん新學說しんがくせつを主張しゆちやうするものあれば、直たぢに異端いたんなり邪宗じやしうなりとして極刑ごくけいに處おせられたので、爲ために歐洲おしやうの

教權主義の弊

自由討究主義

文運ぶんうんを沮害そがいしたことは實じつに大なるものである。之これに抗かうして起おこつた新教しんけうは自由じゆう討究たうきゆうを以もつて立つたのであるが、それは其宗教そのしうけうの上うへに於おいてのみで、羅馬教會ろまけうかいの教條けうじやうには服從ふくじやうしないが、基督キリストの所説しよせつを以もつて金科玉條きんこぎよくじやうとし、一毫いっごうの批判ひはんだもこの上うへには下くだすことを許ゆるさなかつたので、未だ純乎じゆんこたる自由じゆう討究たうきゆうとはいへない。輓近わんきん世界の交通かうつう大おほに開ひらけ、千里比隣せんりひりんの如ごとく、學術がくじゆつの研鑽けんざんも其歩そのほを進すすめて、異端いたんとし邪宗じやしうとして排斥はいせきしたりし回々まいまい教けうも佛敎ぶつけうも神かみの特示とくしと誇まこりたる基督敎キリストけうと共に比較ひかく研究けんきゆうせらるゝに至いたつて自由じゆう討究たうきゆうの風ふうは思想界ししうがいを靡なびかして、今いまやいづれの宗教しうけうも唯ただだ古來こらいの教權傳説けうけんでんせつによるのみでは其信仰そのしんかうを鼓吹こすいすることが出来できなくなつて、勢いきほひ其批判そのひはんを理り性の自由じゆうに任せねばならぬことゝなつた。これ實じつに人文じんぶんの一大いだい發展はつてんで宇宙うちうの大道だうだうはこれによりて私わたくしなく顯示けんじせられ、天地てんちの眞理しんりは明あきらかに其光そのひかり

道とは何ぞや

を放つに至るのである。

○既に自由討究を主義とす、勢ひ他の宗教に對して寛容の態度を執らねばならぬ。月の光は草の葉に置く露にも宿るが如く真理の輝きは蒙昧の宗教の中にも之れを認むることが出来るのである。彼等は尙ほ進歩の路上にあるもので之れを啓發し誘導すべきもので、排斥すべきものではない。

○吾等は我が信ずる佛教を以て圓滿なる真理を顯現とし、宇宙の大道は之れによりて遺憾なく發揮せられたりとするのであるが、他の宗教には真理の微光あり大道の片影あることを疑はぬのである。

○大道は常に現前して古今の變あるべきではないが、之れを見る人智に文野の差があるから昨是今非の相違がないではない。昨是今非と認めてゆく中に進歩

昨是今非

宗教の進歩

もあれば發達もあるので、大道其者に變化はなくとも、これを顯示する宗教には變化がないとはいはれぬ。否な此變化が即ち宗教の進歩で、人文の開發である。漫に古來の傳説を固執して之れ以外に大道なく真理なしといふものは宗教を死物たらしむるもので決して道を求むる法ではない。

○「誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり」で、公平無私、自由平等なる宇宙の大道を體得して、之れに隨順してゆく所に人の道はある。

はりつたふ鼠の道も道なれど

まことの道ぞ人のゆく道 (行誠上人)

此宇宙の大道を體得して、至誠となり博愛となり正義となる。

○至誠は吾等が宇宙の大道と合致する時に自然に起るの心の状態で、所謂性に

至誠

道とは何ぞや



率ふの時である、佛性の輝き出したる時である。此心常に失ふことなくば、公平無私、自由平等で、正義も博愛もこれより出るのである。西郷隆盛は至誠を以て人を感じしめた人である。勝海舟曾て語りていふ。

西郷に及ぶここの出来ないのは、その大膽識と大誠意とにあるのだ。おれの一言を信じて、たつた一人で江戸に乗込む、おれだつて事に處して、多少の權謀を用ひないこどもないが、たゞこの西郷の至誠はおれをして相欺くに忍びざらしめた。この時に際して小箒淺略を事とするのは、却てこの人の爲めに腸を見すかされるばかりだと思つて、おれも至誠を以て之れに應じたから江戸城受渡もあの通り立談の間に済んだのサ (氷川清話) 至誠は實に人道の根柢である。

至誠は  
人道の  
根柢

◎宇宙の大法は秩序整然因果の規律は一糸亂れず、こゝに正義あり。天地の調和は渾然として雍穆、相補ひ相助く、こゝに博愛あり、至誠、正義、博愛、この三は人の行ふべきの道にして、貴賤も老幼と男女も貧富によりて異なるべきものでない、此心親子の間に起つて孝となり、君臣の間にあつて忠となり、兄弟の間にあつて友となり、朋友の間にあつて信となる、其名異るといへども、基本所は一、此心、武士に存して武士道となり、此心商賈に存して商業道德となり、此心藝術家に存して藝術道となる。其業とする所は人によりて同じからざるが、其道とすべき所、此外にあるべきではない。

◎道は人として守るべきことで、豪貴なるが故に守らざるも可なり、貧賤なるが故に守らざるも不可なし。商賈なるが故に守るを要せず。藝術家なるが故に

道は何  
人も守  
らざる  
べから

道とは何ぞや

守らざるも差支なしなどいふ除外例のあるべきものでない、道は普遍なり、いづれの所にも存するが故に、いづれの人も亦守らざるを得ざるのである。

◎武士道の鼓吹者を以て稱せらるゝ山鹿素行が、

人既に我職分を究明するに及んでは、其職分をつとむるに道なくんばあるべからざれば、こゝに於て道といふものに志出来るべき事也。たとへば京へ行べきと思ふに及んでは其道をしらざれば不可能行不<sub>レ</sub>知してしひて行ば皆邪路に可<sub>レ</sub>入也。士の身を修め君につかへ、父に孝行し、兄弟夫婦朋友に相交つて、其快く相知するごとくに致さんことを知は、其道を尋ねて其用をしるに在べき也。而して道あらんやとの志出来ば、我より先だつて志あつて能く行ひ得たらん人を求め、是に案内を頼んで、その引導に任せつべし。其

師たる人の行跡所<sub>レ</sub>違あるか、言は似て其事物に應ずる處不<sub>レ</sub>明には速に去て勿<sub>レ</sub>從。邪師の教に久しくそまるときは、不<sub>レ</sub>覺其人に荷擔あつて誠の道に彌とほざかるべし。加<sub>レ</sub>此外を尋ね學ぶといへども外に聖人の師なくんば、自ら立歸つて内に省ると云は、聖人の道聊かしひて致す處なく、唯天徳の自然にまかせて至る教のみなれば、我に志を立處あらんには事は習知て至るべく、其本意は推して自得するに在るべき也。況や古の聖人、人を道びくのための格言を垂れ玉へり、我是を以てつゝしみ勤めんには聖人の大道こゝにおいて可<sub>レ</sub>得也。人々各五倫の序あることを知り、士の道のあらんずる事を知といへども、或自らは是こして足れりこし、或は邪師を信じて勞して無<sub>レ</sub>功が如し。是邪道に志す所の輕薄なる事よりおこりぬべし。孔子曰、志<sub>レ</sub>

知あつて行なふ  
す全ければ

商人の道

於レ道、とは、此心にや、道といふもの、可レ有、私を以ては論ぜられざる事也と、其志の立ことあらざれば、道に可レ至様なし。故に道に志といへる也。世に少しなれて賢がほなる輩は推して道を定め、この外に別に相こころなきことは非すと、私の意見を立るを以て道こころに遠ざかりて、遂に大道に不得入也。されば、士の職分を知るこころも道に志す處あらざれば、知あつて行ななければ不レ全也。尤も詳に可ニ究理一也。(士道)

といへるは、唯だ武士の道に就ての心得たるのみならず、凡ての人の道とすべきことである。

◎石田梅巖が商人の道として、

商人の其始めをいはゞ、古へは其餘りあるものを以て其不足ものに易へて、

互に通用するを以て本とするこかや、商人は勘定委しくして今日の渡世を致す者なれば、一錢輕しといふべきにあらず。之を重ねて富の主は天下の人なり、主の心も我が心と同じきゆるに我が一錢を惜む心を推して賣物に念を入れ、少しも鹿相にせずして賣渡さば、買人の心も、初は金銀惜しと思へども代物のよきを以て、其惜む心自ら止むべし、惜む心を止め善に化するの外あらんや、且つ天下の財寶を通用して萬民の心をやすむるなれば、天地四時流行し萬物育はるゝと同じく相合はなん。此の如くにして富山の如くに至るとも慾心とはいふべからず。慾心なくして一錢の貴を惜しみ、青砥左衛門が五十錢を散じて十錢を天下の爲めに惜まれし心を味ふべし。此の如くならば天下公けの儉約にもかなひ、天命に合ふて福を得べし、福を得て萬民の心を

道さは何ぞや

安んずるなれば、天下の百姓といふものにて、常に天下太平を祈るに同じ  
 且つ御法を守り我身を敬むべし、商人と云ふとも聖人の道を知らずば、同じ  
 金銀をもうけながら、不義の金銀をもうけ、子孫の絶ゆる理に至るべし、實  
 に子孫を愛せば道を學んで榮ふることを致すべし。

これも亦唯だ商人のみの心得ではなく、凡ての人の道とすべきことである。

◎清元延壽翁が「藝といふものは能く演らうと思ふと、アド氣がさしていけな  
 いから、何時でも無難に演る積りで語れ」(唾玉集)というたのも、圍碁の能手  
 中川龜三郎が「勝たうと思へば我があつて石に無理が出来る、唯だ一目一目正  
 しく打たうと覺悟して皆な正しく打てば勝つことが出来る」というたのも、皆  
 な吾等が處世の道を示したものでないか。

曰く言  
 ひ難し

◎道とは何ぞや、曰く言ひ難しであるが、上來の説述で其如何なるものなるや  
 を髣髴せしむることが出来たならば、吾等の幸福である。道は明白なり、人に  
 由らず、事に由らず、時に由らず、所に由らず、一切に遍通す、修めて豈に得  
 られざるのことならんや。

## 二人の心

研究の困難……佛教は心を主とす……事心理心……意識……阿頼耶……  
 總該萬有心……眞善美を求む……悲哀の快感……誠心……空也上人……  
 三遊亭圓朝……外界の影響……修道者の任務

心とは何ぞ

○人の心とは如何なるものであらう。これ古今東西の學者が等しく頭を傾むけるの大問題で、他の問題の如く實驗と觀察とによりて直に定むることの出来るといふ風ではなく、一面には内省法によりて主觀的に考へて見ねばならぬ問題であるから、頗る其答解がむづかしく、且つ又曖昧たるを免れぬ。最近心理學の發達は此不完全なる内省法を棄て、専ら實驗を主とし、心身の關係を査究して心の現象を惹起すべき生理的條件を明にし、進んでは心と心との關係を示し

て妙を盡くすに至つたが、其心の本質如何に至つては依然として哲學上の問題として遺され、其思索に一任せられて居る。

思ひやる心は海を渡れども

文しなれば知らずやあるらん

で、人の心といふものは解し易きものでない、此問題は實に哲學上、心理學上、倫理學上、美學上、社會學上、乃至教育學上、宗教學上の大問題で、まことにシヨツペンハワーの云ひける如く心の研究は一切哲學の基礎となり根柢となるものである。併し予は今これらの大問題に向つて、喙を容れようとするのではない。一應佛教では如何に此心を見るかといふことを略述して、こゝに吾等が修道の葉を得むとするのである。

人の心

○凡そ宗教といふものは、われ／＼精神の安慰を示すものであるから心識の問題、靈魂の問題はいづれも其主要部を占めて居るのであるが、殊に佛教は心を以て本とし、

我が佛法の中には心を以て主と爲す、一切の諸法、心に由らざるはなし。(心地觀經)

一切の法に於て心を前導と爲す、若し能く心を知れば悉く衆法を知る、種々の世法は皆な心に由りて造らるればなり (般若經)

事心  
理心  
なぞとある。一體佛教で心を論ずるに二通りあつて、一は事心として個人的心を説き、他は理心として萬有的の心を談じて終に此個人的の心の本源を以て萬有的の心にと示すので、一を又緣慮心と名け、他を又眞實心といふ。この眞

心門の意識

實心こそ吾等が心の奥に潜める宇宙の大靈と相通ぜる靈光である。

○通常心の門戸と云はるものは、眼、耳、鼻、舌、身で、此五識によりて色、聲、香、味、觸の五境を感ず、此五を統一するものを意識と名く、吾等の通常呼ぶ所の心とはこれである。此意識も亦二に分つこころが出来るので、一を五俱の意識(又明了意識)といひ、他を獨頭の意識といふ、五俱の意識といふのは五官機能の知覺と同時に起るので、獨頭の意識といふのは、五官機能の知覺を離れて働く意識で、これに三ある。

- 一 定中意識 靜坐冥想の時に起る心の状態
- 二 獨散意識 記憶の再現想像等の心の作用
- 三 夢中意識 睡眠中に起る心の作用

人の心

をいふのである。

○併し佛教では之れを以て心の本源とは認めない。此意識の奥に阿頼耶識（アライヤ）といふ微細なる我執起つて迷ひの本となるといふやうに示す。即ち阿頼耶識といふのは個人的の心の主人公であるが、併し佛教の議論は、之に止まらぬ、更らに此阿頼耶の本源を究めて眞如に出るとし、眞實如常なる宇宙の實在より出でたるものに外ならずといひ、事心の談は一步を進めて理心の談なる、大乘佛教の極致に至つては總該萬有心即ち宇宙精神を説き、吾等の心も此心と脉絡貫通するといひ、一切衆生悉有佛性の説を立てるのである。これらの事を詳しくいへば、いろ／＼面白いこともあるのであるが、今は唯だ佛教では如何に心

阿頼耶識

末那識

眞如

を説くかといふ梗概を示しただけである。

○世にも面白きは人の心で、本來此宇宙の大靈と脉絡貫通する立派な性を持ちながら迷ひに迷うて其本性を失ひ、善を善とし、惡を惡とすることをだに忘れて居るのであるが、尙ほ其奥底には佛性の光潜むが故に、心機一轉、こゝに向上の道を辿ることが少くないのである。吾等には生來、解らぬことを解らしたいといふ欲求がある。解れば愉快を感じるし、解らねば不快である。これは吾等が自然に具へて居る性情で、宇宙的欲求とでもいふべきものであらう。吾等は自然に美を美とし醜を醜とする心があるが如く、眞を求むる心がある。音に美を喜び眞を求むる心があるばかりでなく、又善を好み惡を憎むの心がある演劇を見ても、小説を讀んでも、善人榮え惡人亡ぶの時、吾等が心には自然に

宇宙的欲求

人の心

快感を生ずる。是は自然的なもの先天的なもの本來具有のものである、即ち吾等の心には眞善美を求むるの自然の性情があつて、これに逢着した時には心中おのづから快感を生ずるのである、これ宇宙の大靈と脈絡貫通せる佛性の輝きではあるまいか。

◎こゝに一つ不思議に感ぜられるのは、吾等が演劇を見、小説を讀んで心に快感を生ずるのは多く悲哀な事蹟にあることで、古來の傑作多くは悲劇である。

泣きもせでなくまねするを見て泣いて

泣かぬ顔する芝居見る人

泣きながら喜び、泣きながら面白味を感じる。これ等は什麼の理由であらう。これは一寸矛盾のやうに感ぜられるが、これも亦決して外の理由ではない。ハ

同情の發現

ルトマンの美學にいふ所に考へても、自分が其悲劇中の人に同情して我を忘れて、身につまされる所に快感を生ずるので、矢張、心の奥に潜める同情の發現に過ぎない、人の心は妙なもので他に同情するといふ所に云ひ知れぬ愉快を感じるのである。これ等のことを諸種の方面から研究すればいろ／＼面白いこともあるであらうがそれは暫く他日に譲りて、こゝには人の心の奥に此美しき性情が自然に具はつて居るこゝをいふことをいうに止めて置く。

◎人の心の奥には此美しき性情があるのであるから、他を感じしむるの第一義も亦此美しい心の外はない。此美しき心、吾等はこれを名けて眞我といひ、更らに語を換へて「まごころ」こゝいふので、即ち佛性の輝きとも見るべきものである。此「まごころ」は何人も持つて居るのであるが唯迷ひの雲深くして其光を見

眞我



るこころが出来ないのである。其光は見るこころは出来ないが、その光がないのではないから、此心を以てして他を感じしむることの出来ないことはない。此「まごころ」を以てすれば如何なる悪人にも涙を流さしめることが出来る。信ずるので、恰も太陽の光線が如何なる陋巷をも照すが如く、「まごころ」の輝きは如何なる悪人の胸の中をも照らすことが出来ると思ふのである。

◎空也上人といふは、金枝玉葉の御身を以て衆生教化に力を盡された教界の偉人である。上人或る時淋しき山路を旅せらるゝと、二三の盜賊、上人の前に立ち塞り、金を出せよと白刃を閃かして迫りけるに、上人之れを見てホロ／＼と涙を流し、後にはサメ／＼と泣き給ふに、盜賊等は嘲笑つて、出家の身にてかくも財物を愛着するか云ひければ、上人否とよ、われの泣きしは我が財物の

空也上人

盜賊の改悟

惜しきが爲めにあらず、汝等が斯かる悪業を爲して未來に如何なる罪果を受けんと、そを思ひやりて悲みに耐へ難く、思はずも聲を放ちて泣きしなりとのたまひしに、盜賊は大に感じ、之れ凡人にあらずとて一物をも取らずに逃げ去りしが、翌日上人の御寺に詣で、出家させ給へとて、吾等昨夜上人に別れて盜賊を働かんとしたるが、上人ののたまひし未來の罪果の思ひやられて何さなく心咎めし、さては我が罪の重きに堪へ難く、かくは打揃うて出家せんとは致すなりと云ひければ、上人はこれを聽きて、これ眞の懺悔なりとて其請ひを許して弟子とせられたといふ話がある。實に至誠以て人を感じしめた例として見るべきではないか。

◎これと事異れどいと面白きは或る人の語られし左の一話である。

三遊亭圓朝といふのは近代有名な落語家である、此の男は非常に佛教に熱心で無舌居士といふてをつたほどであるが、此の男が佛教に歸した因縁が面白い、或る時山岡鐵舟居士が、圓朝を呼んで、おまへは日本一の話しの名人であるが、己れの好きな話を一つしてくれぬか、それは外でもない己れの小供の時分に母親に添乳せられて、いつも桃太郎の話をきいたがそれが如何にも面白く、スヤ／＼と眠るころが出来た。母親は話は上手でなかつたが、己れには非常に面白かつた、話の下手な母親のでさへ面白いのであるから、況して、日本一の名人たるおまへのを聞いたら、さぞ面白からう、どうか一つ聞かせて呉れといはれた。圓朝は髯ムシヤの居士の前で桃太郎の話をすることが出来ない、スヤ／＼と小供が眠るやうに話せない、ソコデ到底こゝで私は

御話は出来ません、よし致しましたところが御母堂のやうには参りませんといふと、小供も知つて居る桃太郎の話が己れの前で出来ないやうで日本一といふことの出来るものではない。まあ何故出来ないかを考へて見ると云はれて、圓朝は、母親は話は下手だが誠心を以て子供に語り、我れは話は上手であるが、此心がないから母親のやうに感ぜしむることが出来ないのである、これではならぬというて佛教を究むるやうになつたといふことである。

○人の心は今いふ如く本来美しきものであるが、さまざまの薰習によつて塵垢に染まるので、それには父祖の遺傳によるものもあらうが、多くは境遇の然らしむる所で、山國の人は自然に獨立の氣象に富むが其思想が偏狹に傾き易く、平原國の人は快活であるが、自主の精神に乏しく、都會に育つた人は敏捷では

自然の感化

社會の感化

鑄掛け

あるが、輕薄に流れ、田舎に育つた人は、質朴ではあるが、迂濶な所があると  
 いふやうな自然の感化を受けるもあるし、また家庭の状態で繼母に育てられた  
 子は僻み根性が失せぬし、無規律な家に養はれた子は無規律になるといふやう  
 な影響もあり、又社會の状態にも感化せられて、太平の時には太平な氣風、戰  
 國の時代には戰國の氣風が出来るといふやうな諸種の事情が其人の心に影響し  
 て、本來の心を磨きもすれば曇らせもするのである。田舎では品行方正と云は  
 るゝ人が、都會の腐敗せる空氣に觸れて忽ち墮落するといふこともあれば、こ  
 れまで正直に働いて居つた人が、他人の贅澤を見て心機一轉、終に惡趣に沈淪す  
 るものもないではない。彼の鑄掛け松が、兩國橋上で下に浮べる遊船に三味太  
 鼓の音を聞いて、「人生僅か五十年、あんなに贅澤をするのも一生、又こちとらの

やうに稼ぎ暮らすも一生、同じ一生なら太く短く送るがよい」と鑄掛け道具を河  
 中に投じて盜賊となつたのも、外界の影響によつて心を變じたのである。「金色  
 夜叉」の間貫一が戀愛の不成立に性格を一變して、高利貸となつたのも亦こ  
 れである。かくの如きは古來の小説に其例乏しからざること、又實に吾等の  
 日常に目撃する所である。

○吾等の心は移り易く動き易きもので、よし其本來は美しきものであることも  
 周圍の事情境遇の爲めには、これを掩ひこれを隠くして、全く塵埃堆裡に埋め  
 らるゝに至ることがないでもないから、宗教といひ教育といふものがあつて之  
 れを矯正して其本を失はしめざるやうにするのであるが、修養其功を積んだ人  
 は、自ら守ること堅く、外界の爲めに動かさるゝことはないが、一般普通の人

人の心

人は、なか／＼此誘惑に勝つことがむづかしい。それであるから吾等は單に修道を勧むるのみならず、又社會の風紀を改良して、及ぶべきだけ、これらの誘惑を減じ、墮落の機會を退けて、修道に便ならしむるやうに心掛けねばならぬ。

○人は模倣の動物で、世の人皆な酔ふ、吾獨り醒むるこいふやうなことは大修養底の人で初めて出来ることで、凡俗の徒は到底他の模倣者たるに過ぎないのであるから、社會の組織をも改善し、世を擧げて善に向ふといふやうな風にせねばならぬのである。修道者の任務は獨り自ら慎むのみに止らず、他をして慎ましむるといふことをも計らねばならぬ。これ實に天地の化育を助けてゆく吾等の務めではなからうか。

### 三 煩悶と社會

煩悶者の年齢……時代……人生の危機……成功談の影響……戀愛……情死……生活の困難……家庭の不和……社會の壓迫……身體の不健……人生問題の解決……一種の利己主義……志士的精神

青年の煩悶

○青年の煩悶は近時しば／＼耳にすること、甚しきは煩悶死を決する人も少くないといふことである。これを唯だ彼等の意志が薄弱なのであるこいうて等閑に視て居るのは決して憂世の士の行爲ではない。今少しく他の方面から此問題を觀察して諸君の一顧を煩はしたいと思ふのである。

○第一に考へねばならぬのは煩悶死を決する人々の年齢である。それはいろいろあるであらうが、或る統計學者のいふ如く、自殺者數は年齢と正比例です、

自殺者の年齢

年齢の増加するに従て其數を増し、殊に老人に於て自殺者が多いのであるが、其除外例とも見るべきものは、男は廿歳から卅歳、女が十八から廿七八歳までである。其中男女何れが多いかといへば女は實際生活の衝に當ることが少く、且つ女は男に比して境遇に順應する性があるから、どうしても男の方が多い。

○さて其次ぎに如何なる時代に多いかといふことを考へれば、いつも舊社會が打破せられて新社會の組織の未だ成らざる時代に多いことは云ふまでもない、併しこれは確然たる統計がないから立派に言ひ斷ることが出来ぬが平安時代の末期、鎌倉時代の初頭に多數の厭世者を生じ、元祿時代に心中の盛んであつたのも此現象ではなからうか。

○今の日本も此時代に遭遇し、今の青年も亦此の危機に際會して居るのではな

人生の危機

戀愛

成功談

からうか、煩悶の原因はさまざまで、決して人生問題の解決が出来ないといふやうな單純なことではない、時代が此危機であるにかへて加へて青年も亦人生の危機で、舊生活と新生活との過渡期に應ずるものであるから、従來は學校の窓から眺めてをつたものが、遽かに社會へ出て見ると、すべてのことが全く自己の幼稚な思想と背反する、従來は父母の哺育の下に氣樂に生活して來たものが、自ら糊口の途を得なければならぬといふ困難に遭遇する。それにこれまでは會て味つたこともない戀愛といふものをも解し初める、それが又なか／＼意の如くにならぬ、それやこれやで初めて心中に煩悶を生ずることとなる。

○それには等青年の心を鼓動して煩悶の情を切ならしむるものは維新時代の成功談である、一躍青雲の政治家や、一攫千金の事業家の物語は、未だ世馴れず

して自己を過信する青年の空想を刺激し、徒らに成功をあせらしめる。あせつたからとて直ちに成功の出来るものではない。維新當時と今とは時代が違ふ。此時代の違ふここに氣附かずして無暗にあせる、あせりあせつて終に何の成す處なく、煩悶の情いよいよ加はらざるを得ない。併しコンナこと位で人は死を決するものではない。

戀愛小説

○戀愛といふことも亦人をして煩悶に陥しむる動機である。才子佳人相慕ふの小説は空想に流れ易き青年を驅りて此戀愛の奴隷たらしめ、佳人の一顧に自己を忘るゝまでの熱情を起すが、對手が必ず此れに同情するや否やは問題である。磯の鮑の片思ひ、終に失戀の不幸に陥る者もある。失戀は煩悶であるには相違ないが、其爲めに死を決する者は萬人中一人位なもので、其煩悶の度を高むる

失戀

情死

ものは相思うて相添ふ能はざるにある。兩者の戀情は其極度に達し、然も社會の事情、家庭の境遇これを許さず、月下相擁して泣く、これ實に悲惨の極である。情死は多く是等の男女によつて行はれるのであるが、これとても其直接の原因は多く此他にあるのである。

宗教思想

○人生は苦の海なり。人は罪の兒なりといふ羸弱なる宗教思想も亦確かに煩悶を誘致するの原因である。併し人はコンナ形而上の問題の爲めに死を決するものではない。中には眞面目に是等のことを苦にして死ぬものもないではないが、その多くは既に精神に異状を呈して居るもので、純粹に此の爲めに死を決するものは絶無に近いのである。

○それはトルストイの懺悔録に現れて居るやうに、罪惡の自覺によつて死を企

つることがないではないが、なか／＼思ひ切つて死ぬものではなく、何等かの理由を附して自ら慰め自ら止るに至るものである。

○生を欲するのは人の本能である。此れを抛つといふには死の生に優るここを發見せなければやるものではない。死の生に優る場合とはドンナ場合であらうそれにはいろ／＼あるであらうが、所詮は死を以て生の苦痛を免れようとするのである。死を以て生の苦を免れんとするとは如何なる場合であらう。これも人々の境遇や事情によつて一定しないが、其主要なるものは、一、生活の困難二、家庭の不和、三、社會の壓迫、四、身體の不健康である。而して其中最も主要なるものは生活の困難である。

生活の困難

○生活の困難、これほど人を煩悶せしむるものはない。理想通りの生活が出来

借金の督促

ないからとて煩悶するなどといふのは贅澤の限りだ。實際生活の困難といふのはソナナものではない。家が陋いとか、着物が汚れたとかは殆んど問題にならぬ、食ふ米もないといふのだ。サア斯うなると、いかに無頓着な男でも煩悶せずには居られない。それも自分一人ならば、どうともするが、親あり妻あり子ありと來ては困難がいよ／＼加はる、それに成るべく親や妻子に其のことを知らせまいとすれば、心中の苦惱は殆んど言語に絶する、こればかりでも充分だのに、ソナナ場合になると、屹度借金が出來て居るから督促矢の如くさいふ境遇に至る。徳義も何も解せないものならば格別、少しでも徳義の心あれば約束通り返したいが、返す處か明日の糊口に窮する。これこの時、この際、何の策の出づべきがあらう。それも何の仕事もなしにブラ／＼して居るのなら、かう

なるも、自業自得ぢやが、勞力と報酬とは伴はず、額に汗した金が其の日の暮しを立つるに足らぬといふ場合になれば、氣の短いものや、修養の深からぬものは、死を決するに至るは無理もないことではないか。

○慈悲深い社會は、乞食なり貧民なりと名乗つて他に寄生せんごするものは之を救うて呉れるが、此の自ら汗して尙足らざる窮民は救うて呉れない、寧ろ冷評して働きのないといふ、働きのないのではない、働きの道がないのである、働きの道がないのではない、働いて報酬がこれに適はぬのである。

○學校をさへ出れば生活の途を得られると思つて居つた青年が、ポカリと此社會に投げ出されて此困難に遭遇して、誰か人生の不如意を啣たぬものがあらう現に借金をして學資を得て居つた青年が、卒業後其學資の額にも達せぬ給金に

働くし  
報酬は  
適にす

死んだ  
がまし

家庭の  
不和

餘儀なくせられて居るものが多いではないか、學問で飯を食ふといふのも誤りだが、今の社會の勞力と報酬との權衡を得ないといふも事實である。

○それは兎に角、生活の困難が煩悶死を決するの心を起さしむる主要の原因であることを否定することが出来ない。殊に少しく氣骨ある青年が、此困難の爲めにつまらぬ人にまで頭を下げねばならぬといふことは耐へ忍ぶことの出来るものではない。イツソ死んだ方がましであるとは此困難に遇する人から吾等のしばし耳にする處である、否な僕とても此の考を發したところがある。これは實際其困難に遭遇した人でなければわからぬことであるが、妻は病床に臥し兒は飢に泣くといふ時ほど世のあぢきなさを切實に感ずることはない。

○家庭の不和も亦實に煩悶の情を深からしむる一因である。如何に生活が困難



でも父母妻子相慰めて居れば、暗黒の裡にも一道の光明はあるのであるが、貧苦は常に（例外はなきでもないが）家庭の不和を招くの原因となつて、さなきだに心を勞する上に又一層の苦惱を加ふる者である。よし貧苦にあらずとするも、家庭の不和ほど心苦しいものはない、相愛の夫婦も此の爲めに別れねばならぬこゝとなり、親しかりし父子の間にも他人がましき隠し事をするやうになる、人生此れより面白くないことがあらうか、婚姻後に放蕩を始めるものゝあるのを一概に新婦の悪いやうにいふが、多く此の家庭の不和より起る煩悶を忘れんが爲に自暴自棄に陥るのである。自暴自棄、放蕩に身を持ち崩すといふことも出来ず、さればとて此不和を根柢から處理するの勇氣もなく、父母の命には背きたくなく、妻子の情も斷ち難いといふこゝになると煩悶は散ずるに處

がなくなり、若し又其妻なるものが、夫の困難をも察せず驕慢にして舅姑に下らず、ブン／＼怒り通しこいふことになる、夫たるものゝ煩悶は一層深からざるを得ない。ソナナことは何でもない、離縁すればそれで済むこいふ人もあらうが、社會は其離縁を許すの度量があらうか。

○極く下等な社會なら、家庭の不和はなぐり合で其鬱を散じ、口論で其悶を醫さうが、少し教育を受けたものには、これは出来ない。離縁のこともその通りで、成るべく家庭の祕事を他人に知らせたくないといふ情もあり、世間から厭な噂を聞くのも心苦しいので、辛抱に辛抱を重ね、煩悶に煩悶を積むこゝは少くないのである。此場合についで死んでしまふたらなぞこいふ感の起るのは氣の弱いものには免れない處である。

◎統計の示す所に依つても謀故殺の全数の三分の一は家庭の不和に原因し、自殺者の半数は精神錯亂であるが、之を除けば家庭の不和に因するものが多数である。若し夫れ其の精神錯亂の原因を調査したならば、恐らくは此れも家庭の不和が主要な因ではあるまいか、之を要するに家庭の不和は煩悶死を決せしむるの動機となるの素質を有するところは疑ふことは出来ない、よし死を決するまでの甚だしきに至らずとも、其人の人格を變ずるに與つて力あることは争ふべからざる事實である。

◎僻み根性を以て見れば社會は皆な我を敵とし、人は悉く我を冷遇するやうに思はれる。内、家庭に於て（生計の困難若くは不和の爲めに）煩悶あるものが此社會の壓迫を受く、憤惋禁する能はざるに至るは人情の常である、今の社會

は弱者に同情するほどの寛量がない。失敗者を慰藉するほどの慈仁がない。是非善惡を分別するほどの公平はない。弱いものは苦めらるゝに極まつて居る金のある處へ金は集り、貧乏人はいつも貧乏だ。未だ此實相を看取せざる青年が此壓迫に對し世を恨み人を果敢なみて、自分の身の置場もないやうに感ずるのは止むなき行程ではないか。

◎殊に身は病魔の侵す處となつて、働くに由なく、働くに由なきが故に生計の途なく、親族朋友の之を慰むるものなく、社會の之を救ふなきに遇ふ、病床靜かに過ぎこし方を想ひ、行く末を考ふ、萬感胸に起りて、死神の魅する處となるも亦少なからぬ現象である。

◎ツマリ煩悶死を決するに至るのは、これらの原因に依るもので、所詮は死に

由つて目前の苦痛を免れむとするに過ぎない。人生問題の解決に苦むなぞと云ふのは、一時の流行に驅られて此言をなすのか、若くは自分の死を高尙な理由にしようとする野心から出たのに外ならない。

◎人生問題の解決は果して死の一字で出来るか、死の解決が出来たら生も亦解決せられねばならぬ。わからぬから死ぬといふのは何の噓語だ。それを眞面目に受けて、あゝのかうのと議論して解決を與へようとする宗教家も迂濶だが又其責を一に宗教家に歸せようとするのも大間違だ。

◎煩悶死を決するの動機は多く物質的原因にある。精神的原因はそれに附加せられた口實に外ならぬのだ。此口實のみを見て其の眞原因を看過して居つたのは愚も亦甚だしいではないか、此問題は宗教問題よりも寧ろ社會問題であ

宗教問題  
も社會問題

る。社會組織の改善が此煩悶死を決する徒を制するの捷徑である。

◎勿論人生觀の如何が與つて力ないではないが、唯だ此れだけによつて死を仰止し、煩悶を解決し得ると思つて居るのは正鵠を得たものとはいへない。

◎世の中は廣いし、人間の精神状態にもさまざまあるから、一意、人生問題の解決の爲めに煩悶する人もないではないが、それは絶えて無くして僅かにあることで、大抵は今いうたやうな物質的煩悶に出るものである。

◎よし其原因が精神的たると物質的たるとを問はず、煩悶死を決するは譽めた話ではない。眞面目に人生問題の解決に苦むといふなら、何故飽く迄之を解決しようとして努力せぬか、死して何の効がある。よし死は快樂なりと思惟し、死によつて解決せられたりとするも、爲めに社會の共同生活を害し、其進歩

物質的  
煩悶

利己主義の一種

發達を妨ぐることはないか、自己の快樂を思ふに他に及ぶの害を思はざる不徳不義の行動ではないか。況して煩悶死を決するものゝ多くは、自家目前の苦痛を逃れんとするに急に於て他に及ぼすの利害を感ぜざるものをや。吾人は此れを評して一種の利己主義といふ。

○死を以て利己なりと評するは不穩當のやうではあるが、存在を保つよりも死を以て自己に利益なりと思惟して爲せる行動であるから矢張利己主義ではないか、煩悶死を決するものゝ死は、決して志士仁人の身を殺して仁をなすの利他的行動とは同一視することが出来ない。

○此利己主義の上に冠するに人生問題だとか何とかいふ立派な名を以てするので、其實名利の情から出たものであるといふたからとて過言ではあるまい、名

社會組織の改革

利の慾に汲々たる青年が、此社會に於て之を得る能はず、死して幾分なりとも其慾望を達せんとするのは、事情實に憫むべきものがあるのである。

○吾人は決して煩悶死を決する人々に對して同情を持たぬのではない、彼等に同情するの餘り、其眞原因に向つての求濟を講ぜられんことを世の志士仁人に請ふのである。百言は一行に如かず、心靈の慰安といふことも結構ではあるが、それよりも社會組織の改革と云ふことは、一層適切ではなからうか。

○しばく云ふ如く修道者は自ら修むると共に他をして修めしむるの境遇を作らざるべからず。こゝに於て手を社會改良に下すの必要はますます切である。これをこれ志士的精神といふので、この精神なきものは吾等の排斥する超絶主義者で眞の修道者ではない。

### 四 徒歩的的人生觀

五十年の大旅行……獨立獨歩……共同一致……秩序的進歩

處世の法

○天は人に双脚を與へて進歩すべきことを教へて呉れた、此徒歩これ吾人が世に處するの方法ではないか。

○天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、吾人の一生は實にこれ五十年の大旅行。汽車にも乗るべからず。電車にも乗るべからず。唯だ徒歩せねばならぬのである。

○徒らに汽車や電車の便を藉らんとするものは、他人の權勢に依頼して成功を急にせんとするものである。成功を急にせんとするものであるから他を驟殺す

ることありし、衝突することもあり、又脱線することもある。

○徒歩には此憂がない、天與の双脚を以て行くのであるから獨立獨歩坦々たる大道も、峻しき山路も、面白く愉快に歩むことが出来るのである。それは汽車や車の便によるものよりは困難もあらうし、辛苦も多いのであるが、其代りに趣味は殊に深いのである。

○若し夫れ旅は道連れ世は情で、手を携へて共に行く人があれば、趣味は更らに一段深くなり、愉快も亦増すのである。これ共同一致の必要を示すものではないか。

○人の歩むや一脚を出して一脚を止む。双脚共に出さむとせば顛倒せざるを得ず、双脚共に止むれば歩むこゝが出来ない。双脚共に出さむとするものは、飽

共同一致

徒歩的的人生觀

くここを知らない急進主義で、双脚共に止めむとするものは、足るを知つて進むを知らざる保守主義である。

◎保守主義はやがてこれ樂天的人生觀で、現在に満足することとなり、急進主義は現在に不平を抱く厭世主義となる。厭世主義決して健全なる人生觀ではなく、樂天主義も亦充分な人生觀とはいへぬ。

◎中正穩健、いつの世、いかなる人にも持たれねばならぬ人生觀は、一面に現在の缺陷を認めて進歩せざるべからざるを知ると共に、一面我れも亦現在の羈絆を脱せざるものなるを思つて足を止め、止めては出し、出しては止めつゝ秩序的進歩して天地の化育を助け、社會の發達を計つてゆくことが出来るのである。

◎此人生觀を以てあせらず、撓まず、歩々向上の大道に向つて進取するここが出来るのである。これを徒歩的的人生觀といふ、今の青年が此人生觀に安んじたならば、決して過のあるべき筈はない。

### 五 小なる道德

細謹を顧みる大功……報徳會實踐事項……死者に對する禮義……釣錢……  
…訪問の事……清規

小道徳を忽かに  
すべからず

○小事は行ひ易くして怠り易きことであるが、小は終に大を成すのであるから大なる修養に志すの人は此小なる道德を忽にしてはならぬ。由來我が國には大功は細謹を顧みずなぞといひて小事を慎むことを怠る風が行はれて、此小事を怠慢にすることが、やがて大事を失却するの基であることを知らない。これ實に痛むべきのこゝである。

○大功には細謹を顧みないのであるが、成らうことならば、吾等は細謹をも顧みる大功を望むものである。大道德は何人も注意をするが、小道德は何人も其

大業の  
素地の

注意を怠つて、終に其大道德を累するに至るを知らない。日露戦争の際、花大  
人と呼ばれて特種の運動を試みられた陸軍中佐花田仲之助氏が偉勳は何人も知  
る所であるが、同氏の發起せられたる鹿兒島縣山下報徳會にては、會員擧つて  
爲し易き小道德の實踐に心を盡くし着々其功を奏しつゝあるを知るものは少い  
想ふに此小道德は實に中佐が至誠報國、身を挺して敵地に功を奏せられたる大  
業の素地を爲したるものでなからうか。

○今其會に於て實踐せらるゝ事項の主要なるものを擧げて修道の資とし、吾等  
も亦讀者と共に之れが實踐に心掛けむことを望むのである。  
（會員相互にのみ關  
同地方にのみ適すると思はるる事項は之れを略す）

一、約束の時間を厲行する事

小なる道德

- 一、年に一回以上親の命日に墓参する事
- 一、毎朝先祖又は神佛に禮拜し且つ長上に禮する事
- 一、家内中出入の際は行先を互に告ぐる事
- 一、入浴の際は局部を能く洗うて入湯し湯壺の中に於て垢を落さざる事
- 一、襖、障子の開閉を正うし履物の踏揃に注意する事
- 一、途中又は其他に於て子供の喧嘩、不具者の打擲並店頭の品物又は人家の菓樹等に對し不法の所業を爲すものを認めたるときは成るべく面倒を厭はず教訓示導の勞を執るべき事
- 一、食事の際は禮儀を正うする事
- 一、途中に於て球投げ、繩飛又は羽根つき等の遊戯を子供に成るべく爲さしめざる様注意する事
- 一、途中に於て立談し又は通行する時他人の妨を爲さぬ様注意する事
- 一、郵便物の住所姓名等は明瞭に之を記載し切手は定りの場所に貼付する事
- 一、家庭に於て父母長上の出入には送迎をなして用向を承はり或は出來事を巨細に

申述ふる事

- 一、公會其他に於て傘、杖、履物を間違へざる様注意する事若し自分のものなき時は主人に其旨を告げ勝手に他の物を使用せざる事
- 一、葬式の際は謹肅を守り途上又は會葬場に於て談笑喫煙等不作法の振舞をなさざる事
- 一、師匠の恩を忘れざるため特に恩義ある人には年一回以上訪問書通又は墓参をなす事
- 一、猫鼠等動物の死體其他諸汚物塵芥等を道路及溝渠に放棄せざる事
- 一、葬儀に關する實行事項左の如し
- イ、葬儀は華奢を戒め末禮に泥まらず主禮たる葬祭を重んじ神事佛事を粗略にせざる様注意する事
- ロ、葬祭は成るべく寺院又は共同葬祭場に於て鄭重に施行し親近故舊は勿論一同列席する事
- ハ、會葬者又は加勢人等何人にも茶菓等一切飲食物を出さざる事但し雇人は勿論小なる道徳



加勢人には相當の謝金を與へ又は埋葬後に神官僧侶或は親近故舊に適宜の酒食を供するは妨げなし

二、香典弔慰の贈物は成るべく實用を旨とし分に應じ其志を表するを度とする事

ホ、香典弔慰の返禮は成るべく物品を以てせず自身の回禮を主とする事若し餘裕あるときは慈善事業に寄附するを良とする

一、老幼婦女に對しては船車階段等の昇降其他起居動作に就き難澁と認むる時は成るべく力を添へて扶助する事

一、親戚朋友は勿論隣家に重病若くは不幸ある時は數日間歌舞音曲等を遠慮し同情を表する事但し職業又は稽古の爲にするものは多少斟酌することを得

一、大酒を戒め箸戰及び之に類するものを廢する事

一、公會其他に於て禮讓を守るべきは勿論なれども譲り合に過ぐるは却て座席の混雜を來すに依り主人又は當業の指圖に應じ直に之に従ふ事

一、諸税及授業料等は期日内に納付し督促を受けざる様注意する事

一、書類物品其他人より借りたるものは叮嚀に取扱ひ用濟次第直ちに返納する事

一、人力車又は馬車にて通行するときは困難なる坂路橋梁等に於ては人馬の勞苦を顧み老人子供又は病氣其他止むを得ざる場合の外下車する事

一、訪問するときは成るべく名刺を持參する事若し所持せざる場合に於ては主人の在否に拘らず明かに姓名を告ぐべき事

一、特別の場合の外食事時分又は夜間遅く訪問及長居を避ける様注意する事

一、報恩謝徳の實を擧げん爲め各自又は各家に於て毎月少々宛貯金すること但其方は各自の隨意とす

一、内務省令第一號に依り指定せられたる場所は勿論同省令の趣旨に基き途上其他唾痰の乾燥して飛散の虞ある場所には略痰せざる様注意すること

一、多人數集合の場所に於ては極めて靜肅にし他人の妨害となる行爲をなさないこと

一、門の札標等を明かにすること

一、談話の際は叮嚀なる言語を用ひ長者先輩の氏名を呼び捨てにせざる様注意すること

一、墓地又は屋敷掛道路等掃除の際は他の区域内に塵芥等は可成捨てざる様注意する

二、途中にて家内中のものに行逢ひたるときは必ず禮すること

一、家畜(犬猫鶏)等を取締り他に迷惑を及ぼさざる様注意すること

一、途上其他に於て子護女が其子供の保護を怠るを認めたるときは本人に注意を呼ぶは勿論尙事柄に依りては主人に通知すること

一、有益なる草木を漫りに伐採毀損せざること

一、紙幣貨幣證券は大切に取扱ひ汚損せざる様にすること

一、途上に於て往來等に危険を及ぼし又は妨害となるべき物體あるときは取除く様注意すること

一、途上に於て葬儀に出逢ひたるときは敬意を表すること

一、道路又は人の居所等を探れられたるときは叮嚀に教ゆること

これ皆な小に似て小ならざる大問題である。徒歩的(とほてきじんせいくわん)人生觀(にんじんくわん)を有(いう)する吾等(われら)は道徳(だうとく)

小に似たる大問題

の修養(じうやう)に於ても一歩一歩、爲(な)し易(やす)きより進(すす)むの心得(こころえ)がなくてはならぬ。

◎左(ひだり)に予(よ)が曾(かつ)て是等(これら)の問題(もんだい)に言及(げんきふ)せるもの二三(さん)を舉(あ)げて参考(さんかう)に資(し)せん。死者(ししゃ)に對(たい)する禮義(れいぎ)に就(つ)て、

一、途上(とじやう)死者(ししゃ)の葬儀(そうぎ)に遇(あ)つた時は脱帽(だつぼう)するとか、お辭儀(おじぎ)をするとかの事を忘(わす)れないやうにして貰(もら)ひたい。況(いは)して國家(こくが)の爲(ため)に身命(みんめい)を犠牲(ぎせい)にせられた戦死者(せんししゃ)の葬儀(そうぎ)に對(たい)しては何人(なんにん)も充分(ちゆうぶん)の敬意(けいぎ)を表(あらわ)して貰(もら)ひたい。

一、葬式(そうしき)や法事(ほふし)に列(れい)した人々(ひとびと)は、成(な)る可(よ)く靜肅(じやうじゆ)にして、雜談(ざだん)をしたり又は喫煙(けつえん)をするやうな無禮(むれい)なことは避(よ)ければなりませぬ。煙草(えんそう)をふかしながら葬(そう)の供(か)をしたり笑(わら)ひ興(き)ながら讀經(よみきやう)を聞(き)くなどは以(も)ての外(ほか)のことです。

一、通夜(つうや)に酒(さけ)を飲(の)んで騒(さわ)いだり、法事(ほふし)に放歌亂舞(はうからんぶ)するのも死者(ししゃ)に對(たい)する禮儀(れいぎ)を缺(か)くのですから止(と)めて貰(もら)ひたい。

といふこころがある。

○拙著「朝思暮想」の中に、

○道德を談ずる演説會に空名を列する辯士あり、時間を守らざる會主あり、忠君愛國を教ふる倫理教員にして所得税を免かれんとするものあり。

○我が友米峰、曾て釣銭道德を絶叫し、五錢の買物に五圓紙幣を出して他の迷惑を顧りみざる暴漢多きを憤慨す、これ至言なり。これ大なる道德問題なり。

○往復葉書に返書を與へざるはこれ窃盜なり、返信用切手を亂用するはこれ冒認なり、而して人之れを咎めず。

さいうたことがある。これらの事、いひはいひながら行ひ難きは我が修養の至らぬのではなからうか。

○訪問に就て會て感を記して、

○「世の中に人の來るほどのさきはなし」仕事半ばに用なき客の來訪は、恰も洗濯最中に夕立に遇うたも同様、實にたまつたものにあらず。

○一體日本の習慣は用もなきにお機嫌伺ひなぞ稱し無暗に人を訪問するを以て禮儀と心得、先方の迷惑を顧みず「お變りもござりませぬか」なぞとお變りを望むやうな挨拶は實以て無禮の極なり。

○時は金なり。用なき訪客は之れを盗むものなり、無益の長談は之を騙るものなり、詐偽取財なり、窃盜なり、強盜なり。

○來往は社交の要素なれば招くもよし訪はるもよけれど、これには程度あり、能く其事情を審かにして双方の便を計るべし。自己を本位として他を

察せざる時は偶ま以て社交を害するに至るべし。

○自己に用事ある時の來客はキツパリと斷るべし。斷るのを氣の毒がつて生中の待遇や、下駄に灸の窮策は却て客の感情を害するの動機たるべし。

○來訪者は先づ主人の都合を問うて自己の用を便すべし、ゆるくと時候の挨拶から世間話、主人の生返事にも頓着なく人の噂や自慢話に多くの時間を詐取して『さて今日伺ひましたのは』などと用談に移るは主人虐待の最も甚しきものなり。

○我が友某、客の長ツ尻を戒めんとて應接室に墨黒々と、

去事了速

無常迅速、生死事大、四來賓客、事了速去、

と書けるに或人悠々として長談坐を去らず、耐りかねてそれる指せば、其人

平然として事ありて來るものは事了れば速に去るべし、余は事なくして來る、抑も何の時に去るべきと、友終ひにこれを撤去しぬ。

○用談あつて來るものは事了れば去るべし、用なきの來客ほど取扱ひ難きはなし、朋友といふもの多くは此用なきの客なるぞ憂き、憂しこはいへど、これらの客ほど慕はしきはなし。

○吾、無聊に苦むの時友あり遠方より來る、正にこれ大早に雲霓を望み得たるが如し、要用の用か無用の用か、かゝるは畢竟得手勝手の動物たるに過ぎず。

こは一時の偶感たりしに止れども、これらの小事に注意するも亦修道者の心得である。

得手勝動物